KSKQ （ファーストラン！ NO.100） 第三種郵便物承認 通巻第 8698 号 2017 年 2 月 23 日発行 (1)

ファーストラン！ KSKQ FIRST RUN!

－多くの仲間とともに現在を変え未来を創造するために－

NO.100
2017.1

アートサークル「ミントアンサンブル」の皆さん

特集

ファーストラン 100 号記念企画

推進協座談会

追悼　上田舞さんへ

推進協「会員」を大募集！！

編集：特定非営利活動法人　箕面市障害者の生活と労働推進協議会
http://www.suisinkyo.com/

一九九一年九月三日　第三種郵便物認可　毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行　定価百円

■ CONTENTS ■

3 ファーストラン 100 号記念企画

推進協座談会　第一部

35 カエルのうた

36 追悼　上田舞さんへ

37 編集後記

38 推進協「会員」を大募集！！

「月１回のアトリエ」

ミントアンサンブル絵画サークルができて６年になります。絵を描くのが大好きなメンバーが、月１回第４土曜日にささゆり園をアトリエにして活動しています。

もっと描きたいのに場所がない。そんな声を受けて始まったサークル。ライフタイムミントがささゆり園を借り、大人と子どもの時間帯を分けて活動する今の形に落ち着きました。現在約２５名の人たちが参加しています。

マイペースで自由に制作する人たちの部屋はまさにアトリエで、静かな緊張とでもいう時間が流れています。一人一人の集中力がものすごく、コンクールに入賞する作品もたくさんでてきています。

他方、季節に合わせて工作や描画をするグループは、にぎやかで楽しい雰囲気です。

年１回メイプルホールロビーを借りて作品展をします。全員が出品しますので、是非すばらしい作品を見に来てください。

（二口（ふたくち）　圭子（けいこ）：アートサークル「ミントアンサンブル」講師）

ファーストラン１００号記念企画

推進協座談会

ちょっと間違った記憶でも OK で

第一部 ー国際障害者年と推進協設立ー

●はじめに

「みな、きちんと語ろうとするときは聞く者がいないし、真剣に聞きたいときは語る者がいないのだ」
と、『先生のあさがお』(南木佳士(なぎけいし)著) という小説の言葉にありました。今回、当法人の機関紙がめでたく 100 号となり、「何か面白い企画はないか？」と考えた際に浮かんだ企画の意図をそのまま代弁してくれる言葉だなと思いました。
私は常々、「どのような経緯やどのような思いで当法人が作られ今に至るのか、きちんとその話を聞く場がないものか」と思っていました。単純に知りたいという思いと、当法人の未来を考えた時に皆でルーツを共有しておかないと「いつか、僕らは先に進めなくなる時が来るのでは？」という漠然とした不安からでした。そして、聞いた事を「何か形として残しておきたい」と。そんな思いから、今回のファーストラン！では当法人の団体設立に至るまでの時代や、制度がない中で関わってきた方たちに集まっていただき、語ってくれたことを記事にしました。
なお、座談会は第一部と第二部に分かれ、今号では第一部、次号では第二部を掲載いたします。日本の箕面(みのお)という小さな町で、障害のある人を中心にして活動してきたこのような小さな歴史があったことを知っていただき、少しでも何かを感じていただけたら幸いです。

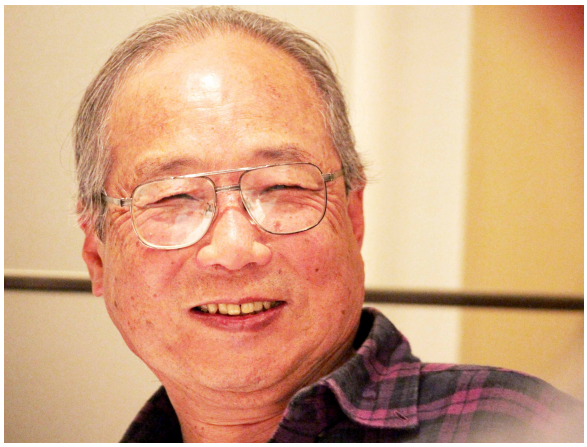
●「国際障害者年(こくさいしょうがいしゃねん)」とは

座談会本文の中に「国際障害者年」という言葉が何度も登場します。座談会をより楽しんでいただくため、ふれておきます。
「国際障害者年」とは障害者の社会生活の保障・参加のための国際的努力の推進を目的として 1976 年の第 31 回国連総会で決定したもので、1981 年が「国際障害者年」にあたります。そのテーマは「完全参加と平等」で、主に下記の内容でした。
①障害者の身体的、精神的な社会適合の援助
②就労の機会保障
③日常生活への参加の促進
④社会参加権の周知徹底のための社会教育と情報の提供
⑤国際障害者年の目的の実施のための措置と方法の確立
さらに 1982 年には、「国際障害者年」の成果をもとに検討されてきた「障害者に関する世界行動計画」が総会で決議。この計画の実施にあたり 1983 年～ 92 年までを「国連・障害者の十年」と宣言し、各国が計画的な課題解決に取り組むことになったのでした。

●座談会第一部　参加メンバープロフィール

【武藤（むとう）　芳和（よしかず）】

大阪出身。100 歳まで生きる気満々の 59 歳。おとめ座のＡ型。1981 年に豊能（とよの）障害者労働センターの事務局長、1990 年にパンハウスワークランドの事務局長を経て 1993 年に当法人の事務局長となる。現在、当法人の理事長。好きなものは旅行、お酒、カラオケ。カラオケの十八番は虎舞竜の「ロード」！本人曰く、「脳出血の影響もあり何でもすぐに忘れるが､嫌なことはずっと憶えている」らしい (笑)。



【濱辺（はまべ）　勲（いさお）】

京都出身の 73 歳。うお座のＯ型。1962 年に電電公社（でんでんこうしゃ）(現ＮＴＴ) に入社。1970 年に箕面市新稲に転入。1982 年、国際障害者年箕面市民会議の世話人代表となる。（2008 年退任）今は退職して隠居の身。山と釣りと読書を愛する。今一番興味のあることは「資本主義の終焉・ポピリズム政治の果てにあるもの」。

【永田（ながた）　よう子（こ）】

大阪出身の 67 歳。当法人には団体設立から関わり、設立２年目に専従職員となる。その時は介護派遣やグループホーム世話人を担当。現在は箕面市障害者共働事業所たんぽぽの代表と当法人の監事と第三者委員を務めている。するどいツッコミで周囲からも一目おかれる存在！？

【高岡（たかおか）　紀美子（きみこ）】

67 歳。ふたご座のＡ型。1993 年～ 1995 年に介護グループ「ガッテンだ！」に参加。国際障害者年箕面市民会議グループ「のび」にも参加し「市民による人権・平和の企画コンペ」に応募し､ガイドヘルプ活動への理解を広める。グループホーム設立と運営委員を経て､現在は当法人理事。草花、和菓子、中島みゆき、マット･デイモンが好き。それと『自由と平和のための京大有志の会の声明書』も。

【大道（だいどう） 広子（ひろこ）】

豊中市出身の 43 歳。みずがめ座のＯ型。17 歳の時、交通事故で右手・右足を切断。19 歳で箕面市障害者共働作業所そよ風の家のスタッフになる。(現、ＮＰＯ法人そよかぜ)24 歳でシングルで愛娘を出産。色々な活動を経て、現在は箕面市人権啓発推進協議会や障害者市民問題啓発研究部会を中心に活動中。当法人の理事でもある。好きなものはブルーハーツ、生アワビ。あとは娘の影響で韓国ドラマやＫ－ＰＯＰにはまる。嫌いなものは「酒とタバコの無い世界」。

【小野（おの） 啓輔（けいすけ）】

大阪市出身の 56 歳。1982 年に箕面市役所に奉職。健康福祉部の副部長、部長を経て、現在は市民部部長。（政策企画や人権自治、職員課、経営改革、市民安全政策なども経験）好きな物はパイナップル、上々颱風、宴会。嫌いな物はヘイトスピーチ。今一番の興味はドローン。市役所の仕事の傍ら、当法人ができる前から障害者の自立生活介護にも関わっていた。

【細谷（ほそたに） 常彦（つねひこ）】

大阪出身の 69 歳。かに座のＢ型。1981 年に国際障害者年箕面市民会議に参加。1987 年に豊能障害者労働センターに就職。2003 年に労働センターを退職してから、ゆめ本社、ゆめ風基金を経て、現在フリー。好きなものは島津亜矢から寺山修司、ビートルズ、ボブディラン、新垣結衣まで様々！今一番の興味は「あるようでなく、ないようである年齢からくるあきらめ感、または島津亜矢の将来」。「恋する経済」というＨＰ、ブログを開いています。

ＨＰ恋する経済　http://koisuru.net/

ブログ・恋する経済　http://koisuru21.blog.fc2.com/

（「恋する経済」で検索）

推進協のあゆみ

1982 年 4 月　豊能障害者労働センター設立。（天然粉石鹸の販売を仕事として、障害者の働く場運動を始める）
1985 年 5 月　箕面市障害者共働作業所そよかぜの家設立。（箕面市で最初の作業所として設立）
1985 年 10 月　箕面市障害者自立の店 たんぽぽ共働作業所設立。
1991 年 5 月　パンハウス・ワークランド設立。
（パンを焼く職人が見つからなかったため、２年だけという約束で武藤さんが働く）

↑推進協団体設立前

↓推進協団体設立後

1993 年 2 月　３つの障害者市民団体（労働センター、ワークランド、そよかぜの家）と市民が資金を拠出し設立。
(事務所はワークランドの２階) 当会が行政との話し合い窓口となる。

1993 年 3 月　自立生活をする障害者市民への介護派遣及びコーディネートを始める。
1994 年 4 月　箕面市の登録ヘルパーとして介護派遣を始める。
1995 年 10 月　事務所移転 (箕面市箕面５丁目)
1998 年 3 月　当会を事業所登録する。
1998 年 5 月　５周年記念イベント『明日へファースト・ラン』開催。(講師：木之下孝利（きのしたたかとし）さん、入部香代子（いるべかよこ）さん)
1998 年 12 月　事務所を現住所に移転。
1999 年 4 月　ＮＰＯ法人設立総会開催。
1999 年 9 月　大阪府よりＮＰＯ法人の認証を受け法人登記を行う。
2000 年 4 月　箕面市と箕面市在宅単身生活重度障害者ホームヘルプサービス事業の委託契約を締結。
2000 年 4 月　箕面市と市町村障害者生活支援事業の委託契約を締結。
業務開始にあたって市町村障害者生活支援事業の専門部署「ライフタイムミント（通称）」を設置。
サービス圏域は箕面市・池田市・能勢（のせ）町・豊能町。

2003 年 4 月　支援費制度の開始。
大阪府より身体障害者居宅支援事業者の指定を受け４月事業開始。
大阪府より知的障害者地域生活援助事業者の指定を受け４月よりグループホーム　結（ゆい）開所。

2003 年 9 月　当法人１０周年記念イベントを開催する。
(講師：牧口一二（まきぐちいちじ）さん、パネリスト：荒木邦公（あらきくにあき）さん、今井雅子（いまいまさこ）さん。らいとぴあで記念講演と懇親会)

2004 年 2 月　中心人物である武藤さんが脳出血で倒れる。(３か月の入院、リハビリを経て５月に退院)

第二部の年表に続く……

●推進協座談会　第一部

【開催日：2016 年 10 月 27 日 (木)　場所協力：美々卯（みみう）箕面店】

進行役の菊池康治。推進協ではグループホーム運営を担当。

推進協に乾杯！

菊池（きくち）：今回は推進協（当法人の略称）の機関紙ファーストランが次回で 100 号になるので、その 100 号記念の特集ということで。進行役を務める通信スタッフの菊池です。よろしくお願いいたします。過去の推進協がどういう流れの中で設立して今に至るのかというのを新しい職員さんや会員さんに改めて知っていただこうと思い、古くから推進協に関わられている方達で座談会を開いて、それを記事にすることになりました。座談会は一部と二部に分かれて、今回が一部という事で団体を設立するまでの話を中心にしていただこうと思います。あと、すみません！通信の新しいスタッフで皆さんの顔と名前が一致してない人がいるかもしれないので、改めて自己紹介をお願いしてもよろしいですか？

細谷（ほそたに）：細谷と言います。私はですね、豊能障害者労働センター (注１) でずっと働いていたんですけど、そこで 92 年に推進協を作ろうっていう事になって、最初に参加させていただいた者です。よろしくお願いします。

永田（ながた）：今は障害者共働事業所たんぽぽ (注２) の永田ですが、推進協の団体設立の時からずっと関わっています。よろしくお願いします。

濱辺（はまべ）：濱辺です。障害者運動については河野（かわの）さん (注３) と出会うたのが運のツキで……。

細谷：運のツキ (笑)。

濱辺：なんとか役に立てればと思います。35 年ほどやっております。ところが推進協の話になるとトンと分からないんです。ちょうど僕が 50 歳の時に団体設立されたんですけど、45 歳ぐらいから完全に会社人間になってしまって、地域の活動では国際障害者年箕面市民会議 (注４) に参加するぐらいしかしてなかって、今日は逆に武藤さんに質問しようかなと思って。そんなんで、よろしくお願い致します！

大道（だいどう）：大道広子（ひろこ）です。よろしくお願い致します。そよかぜの家 (注５) 職員として関わりながら、武藤さんが推進協を立ち上げていくっていった時に一緒にいてたかなと思うんですけど……現、推進協理事です！

武藤（むとう）：流暢にしゃべる記憶は全くないんで！ほとんど私、忘れてますんで、期待せんといてください！

高岡（たかおか）：高岡です。現理事でお世話になっています。推進協は立ち上がった頃に介護人を探すための「ガッテンだ！」というのを武藤さんが一人でやってたんです。その時に「ガッテンだ！」グループの一員になりまして３年ぐらいそこで参加させてもらったのが最初で。あと、グループホームの設立の時に、「のび」(注６) とか、やりました！高岡です、よろしくお願いします。

菊池：本当は河野さんも出席していただきたかったんですが……今回、倒れられたため参加ができず、残念ながら……。

永田：諸悪の根源はみんなあの人です！ (一同笑) ちなみに、今ここにいる通信スタッフは何年ぐらいおられるんですか？

菊池：通信スタッフは新しい職員ばかりで、今年からの人が二人と５～７年の人です。

一同：ふ～ん。

濱辺：そんなら騙そう (一同笑) ！

高岡：ちょっと間違った記憶でもＯＫで (一同笑) ！

菊池：では、まずは乾杯で始めさせていただくということで (笑) ！
細谷：何に乾杯するの？
高岡：推進協に！
一同：じゃあ、乾杯！
濱辺：全員で乾杯ができた！珍しいね！
永田：珍しいね (笑) ！

(注 1) 豊能障害者労働センター：卒業して行き場のない障害者の働く場として 1982 年に誕生した事業所。当初は 6 人でスタートしたが、現在は 60 人の大所帯に。リサイクルショップや食堂を運営。http://www.tumiki.jp/
(注 2) 障害者共働事業所たんぽぽ：1985 年に共働作業所として誕生。「障害があってもなくても、共に働き、共に生きる」事を目指し活動。小学校の購買部、リサイクルショップなどを運営。2012 年 4 月に箕面市障害者共働事業所へ移行。
http://www.tanpopow.com/
(注 3) 河野さん：河野秀忠（かわのひでただ）さん。70 年代後半に箕面に移住して、箕面の障害者運動を先導してきた人。推進協が任意団体だった頃に運営委員会代表も務めていたことがある。障害者のための総合雑誌『そよ風のように街に出よう』の創刊時からの編集長も務める。その雑誌も来夏に惜しまれつつ終刊することに。
(注 4) 国際障害者年箕面市民会議：1981 年、国際障害者年に箕面市民の集まりにより発足した市民会議。
(注 5) そよかぜの家：現在は「ＮＰＯ法人　そよかぜ」。1985 年に市内の中学校を卒業した一人の少年の進路をめぐって教職員と市民が協議をして生み出された箕面で最初の作業所。就労継続支援Ｂ型事業所としてリサイクルショップや陶器制作・販売などを運営。http://nposoyokaze.org/
(注 6) のび：サークル・のび。国際障害者年箕面市民会議の昼間に活動するグループ。もともとは「ささゆり」という名前だったが、改名して「のび」に。農園を作ったり、働くための場やグループホームの必要性について考えたり、様々な障害者問題に取り組んでいた。

始まりは 1981 年、国際障害者年箕面市民会議

菊池：今回は「団体設立のきっかけ～団体設立」の話ということになります。で、武藤さんを軸にして考えると、推進協を立ち上げる前段階で 1982 年 4 月に豊能障害者労働センターが設立されたというところが、大本になるのかなと。で、労働センター（豊能障害者労働センターの略称）の設立の辺りからお話を聞かせていただけたらなと思っています。

永田：最初から異議を申し立てます (笑) ！豊能障害者労働センターができたのも国際障害者年箕面市民会議が箕面にできたことからなので、国際障害者年箕面市民会議から始めるべきだと思います！
菊池：そうなんですか？
永田：うん。労働センターを作ったのは武藤さんだけど、国障年（国際障害者年箕面市民会議の略称。本文では市民会議とも言われる）ができたことで労働センターができたから。武藤さんが最初に障害者団体全体で集まったのは国際障害者年で 1981 年ぐらい。
菊池：1981 年？
永田：1980 年からあって、国障年の中で武藤さんが、「小泉（こいずみ）さん (注 7) が養護学校を卒業して行き場がない！」と言って労働センターができた。だから国障年がなかったら労働センターもないので、そこから始まるのはちょっと。
濱辺：この国障年の流れっちゅうのは箕面だけの流れじゃなくって全国的な流れを受け継いで箕面へたどりついたっていうのがあるんです。いわゆる、神奈川県の川崎を中心にあったＣＰ（脳性麻痺）の人らの集まりで青い芝 (注 8) の運動があって。被差別部落出身者による水平社宣言よりもビックリこくような「愛と正義を否定する」とか「我らは問題解決の路を選ばない」というテーゼで真向から健常者とぶつかるような。そんな全国的な流れから箕面で皆を引っ張ったのは河野さんで、キーマンが武藤さんであって。で、続けて言うていいのかな？
菊池：はい、どうぞ！

濱辺：障害者問題を語るときにどっから語るねんっていうたら「戦後の傷痍軍人を対象にした福祉なのか、それとも障害を持った人全ての問題として扱うのか」という流れがずっと来ててね。で、もっとも顕著に表れだしたのが 70 年。世の中も安保闘争を経て全共闘運動も終着した中で世の仕組みっちゅうのが変わったわけですよね。いわゆる右翼とか左翼とか言われている層の中で。で、僕なんかは元々労働組合の役員をしてたんです。河野さんは、もっと派手に革命家的なものを持っていたし、大衆と一緒に反戦運動もやっていたし、色んなことをやってはったね。で、79 年頃やったかな、河野さんが箕面へ降臨してきた。「下し給うた」という感じでね！

一同：(爆笑)。

濱辺：僕らにしてみたら「障害者問題をお前ら取り上げんかい！」というような勢いで降りてきはって。当時、今の労働センターの事務所の前身が箕面市教職員組合で、そこへ話しに行ったんです。そしたら、たまたま河野さんがいて。その時に初めて河野さんに会ったのだと思います。

高岡：それは知らなかった。

濱辺：で、初めて会った時に「来年、障害者年いうのがあるんやけど、なんかせえへん？」いう話を持ち込んでこられたんですよ。そして国障年のスタイルを作っていった。まあ、国際障害者年箕面市民会議というのは 81 年の３月８日に設立しましたけども、それまでに交渉を始めたり勉強会をしたりしてたんです。「国障年という国連が決めた枠組みってどんなんや？」という。国連・障害者の十年の規約があるわけですから、行政の人たちと一緒にその規約の勉強会を開いて知ろうと。で、これもまた面白い話なんやけど、箕面市ではその当時 80 年以前は、役所の人はおおっぴらに「箕面市には障害者問題はありません」と言うたんです。まあ、えらい福祉の係長で某Ｋさんですけど (笑)。

一同：ハハハハハ (笑) ！

濱辺：で、行政は「話は福祉３団体（「父母の会」「親の会」「福祉会」）から聞きますので……」という感じでいなしてきたんです。そこで「国際障害者年をどう考えるねん！なら、我々が資料を集めて学習会を開くんで行政も出て！」って言って、最初から和やかにやりだしたのが、そもそも始まり (笑)。その時、武藤さんたちは恐らく国障年は意識してなかったね。「小泉さんが高校卒業しても行くとこないやん！」というのが武藤さんや一緒にいた八幡さん（注９）のテーゼやって。で、僕ら市民が「国障年や、なんかしようや！」言うて旗揚げしてね。その結成大会をやって 100 人ぐらいの人が集まりました。

菊池：100 人も！

濱辺：ええ。その中で国障年箕面市民会議に参加しますっていう了解をしたのが 70 名いた。そこへ梶さん (注 10) のお母さんが入って来られたり、亡くなられたけど筋ジスの古市さん (注 11) という方がおられて。

菊池：ここで一旦、小野さんが来られたので、あらためて乾杯！

小野：すみません、遅くなりました！

菊池：う～ん、(小野さんに本文６ページ『推進協のあゆみ』を見せて) 今まだスタート地点にいってないんですよ……(苦笑)。

小野：ああ、なるほど！ここの話が長いと思いますよ (笑) ！

(注 7) 小泉さん：小泉祥一さん。豊能障害者労働センター現代表。重度障害のある箕面市民。
(注 8) 青い芝：全国青い芝の会。障害者のうち、脳性麻痺者による問題提起などを目的として組織された障害者団体。機関紙『青い芝』。
(注 9) 八幡さん：八幡隆司さん。阪神淡路大地震をきっかけに被災地の障害者支援を主とする活動を行う「ＮＰＯ法人ゆめ風基金」http://yumekaze.in.coocan.jp/ の理事、事務局員。
(注 10) 梶さん：梶敏之さん。豊能障害者労働センターで現職。重度障害のある箕面市民。
(注 11) 古市さん：古市章郎さん。筋ジストロフィーの重度障害者。1991 年に永眠。

国障年の最強トリオ

濱辺：で、３人言うたかな？古市さんと……。
菊池：古市さんと小泉さんと梶さん。
濱辺：これが設立当初、いわゆる国障年の設立当初の最強トリオですわ！
永田：トリオ (笑) ！
濱辺:彼らがおったから色んな問題に行政と対応することができた。まず古市さんは……これ話したら長いからなぁ (笑) ！
細谷：それは言うとかないかん。
濱辺：箕面市役所の別枠採用の第一号です。彼は親と一緒に如意谷団地に住んでいて、東能勢、今の豊能町で三伸化成いうポリ袋を作ってる会社に就職したんですよ。で、そこで賃金はぼったくられるは、残業はあるわでえらい目にあって、相談を持ってこられて。当時、色んな相談が入ってきたけど、古市さんの三伸化成の、今でいうブラック企業の訴えが一番顕著やね。で､「どうするべぇか」言うて大阪弁護士会の人権救済委員会で提訴して。そんで勧告をもろて会社とやりあって。結局、和解してから辞めましたけどね。そうやって一つ一つ問題に対応していったりして。
菊池：う～ん。
濱辺：それが、箕面で運動と言われるものが始まった一滴です。そこからスタートです。
永田：そして、それが対市交渉の一番始まりなんです。国障年と古市さんの三伸化成の問題が第一回目。
濱辺：それが 81 年のこと。
永田：そこから国障年というところを基に。だから、今も国障年って名前だけしかないけど対市交渉申し入れ書の一番上に名前を連ねているんです。
濱辺：もう１人、梶さんも絶対はずせないんですよ！紹介さしてーな！
永田：Ｈさん (注 12) は？Ｈさんはどないするの？
濱辺：Ｈはちゃうわ。あれは僕の腰痛の元凶 (笑)。
永田：腰痛の元凶 (笑)。
濱辺：いまだに腰痛や (笑)。で、梶さんはどういう人か言うたら、もともと箕面で生まれた人なんですけども
……僕らが会うた時はいくつぐらい？
永田：中学２年で 14 歳ぐらい。

共に学び、共に育つ

濱辺：ちょっと遡りますけど、梶さんにも関わる教育問題について。いきますね。
永田：フフッ (笑) ！
濱辺：箕面の教育。いわゆる「共に生きよう」って僕らはよく言ってますよね。
永田：「共に学び、共に育つ」。
濱辺：そう、共に地域で学ぼうっていうことが僕らのテーゼみたいなもんです。その箕面市教職員組合が中心になって、比較的早い時期から地域の学校へ受け入れするようになってるんですよ。で、もともとは西南小学校に、僕らもよく知ってる「特殊学級」という言い方の学級があって。その、西南小学校だけが障害を持った子どもたちの児童の行き場だったんですよ。
菊池：西南小だけが？
濱辺：そこへ教師たちが疑問を抱いて、「地域で共に学ぼう」というスローガンを立ててやった。最初の「原学級保障」、隔

離するんじゃなくて、「何年何組の梶君」ということで原学級の在籍は保障して。で、科目によっては養護学級みたいなところで自分の勉強をするという。こういうスタイルを作りだしたんが早かったんです。

濱辺：同じような時期に「障害児保育」も始めてるんですよ。これはすばらしい、誰がやりだしたんでしょうね？

細谷：梶さんって聞いてますよ。

濱辺：それも梶さんからなんや？

細谷：梶さんだけじゃないけど、梶さんのもう一人のお友達がずっと一緒にいて。そんで幼児保育も要求して。

高岡：保育所ができてる頃っていうのは、幼稚園はまだ駄目でしたね。

濱辺：桜（さくら）保育所と……。

高岡：箕面保育所もやってましたね。

濱辺：もうやってました？

高岡：だけど、受け入れるけど午後は駄目だったと思うんです。午前中だけ。

濱辺：それで、梶さんがちょうど 82 年に 15 歳になって、中学校を卒業する時までに梶さんのお母ちゃんが行く末を考えたわけです。「この子が卒業したらどうしよう」と。で、「なんとか役所行って頑張って交渉してくるわぁ」「いってらっしゃ〜い」言うて。

菊池：(笑)。

濱辺：ほんならやることが、また市長とこに行くし、役所の市長室でも行くし、すごい馬力のある素晴らしいお母ちゃんでしたね。

永田：皆さん知らない？その時の市長、中井武兵衛（なかいぶへえ）さん。

菊池：中井？

永田：中井武兵衛。（1973 年〜 1993 年までの箕面市長）

細谷：梶さんが選挙行く時に「ナカイブヘエ、ナカイブヘエ」言うてまして。

一同：(笑)。

濱辺：その中でさっきも言うた古市さんが職員になった。いわゆる障害者の別枠採用も含める「就労５原則」みたいなやつを作って、役所と交わして。

永田：あの「５原則」(注 13)、今でも全然古くないですよね。

濱辺：古くないです。

永田：私こないだ見てみて「へぇーっ」って思って。

大道：「５原則」って？

永田：市民会議が「５原則」っていうの作ったんです。

濱辺：『別枠採用の５原則』……就労に対してね。

大道：どういった内容？

濱辺：「公開の原則」とか。

永田：いわゆるサポートね。だから、「合理的配慮」というような言葉で今は言われているけれども、それにあたるようなこともちゃんと書いてある。

濱辺：そうそうそう。

永田：「配慮すべき」という意味ね。障害者別枠をする場合は。
細谷：ちょっとだけ補足すれば……さっき言うた「箕面の教育が意外と進んどった」というのは、間違うてる！
永田：(爆笑)。
細谷：それは西南小で障害児教育を勝ち取ってん、やっと！
濱辺：そうなんや。
細谷：あれ「西南方式」とか言ってるのは、それまで受け入れてへんかってんから。ほんで「受け入れていこう」言うて。
濱辺：ああ、全然受け入れてなかってんや。

細谷：深夜に倒れそうになりながら交渉したという話を聞いてる。あの有名な委員長が！
一同：(笑)。
細谷：小泉（こいずみ）委員長いうのがおってね。「この子らは地域の子らなんや！」言うて深夜までやりおうて。なんとか西南小学校で「センター方式」いうやつで。豊中はそんなんも早くしてたから。それで豊中のを学習して箕面も動いて。その中で、なんとか西南小がなって。次に箕面第一中学校かな。実を言うたら当時はまだ介護保障がないねん。だから、お母さんがずっと一緒に行ってた。
菊池：えっ、お母さんが？
細谷：梶さんのお母さんが「送り迎えするから受け入れを！」言うて。
菊池：それで、お母さんが……。
細谷：今そんなん言うたらね、「なに言うとんねん後退しとる」言われたらあれやけど、ほんまにこじ開けるために、梶さんのお母さんが一生懸命でしたね。ほんで「私が送り迎えします」いうことを条件に、やっと受け入れた。
濱辺：修学旅行も行きましたよ！
細谷：地域の学校に障害児が行った。初めに行ったうちの一人なんですよね。という、実を言うたらまだ苦難の時代ですわ (笑)。
永田：それでも随分いじめられたり色々あったと……。
菊池：あ、あったんですか。

細谷：それを全部あのお母さんが耐えてね。

永田：中学校でストーブで熱くした学生服のボタンを体に当てられたとかね。言うてみたら初めてでしょ？「共に」という下地ってのがあんまりないからか。そんで梶さんっていつもニコニコしてるからねぇ、その辺が分かりにくいし。まぁでも、形に残れば分かるけどね。

菊池：跡が残れば……。

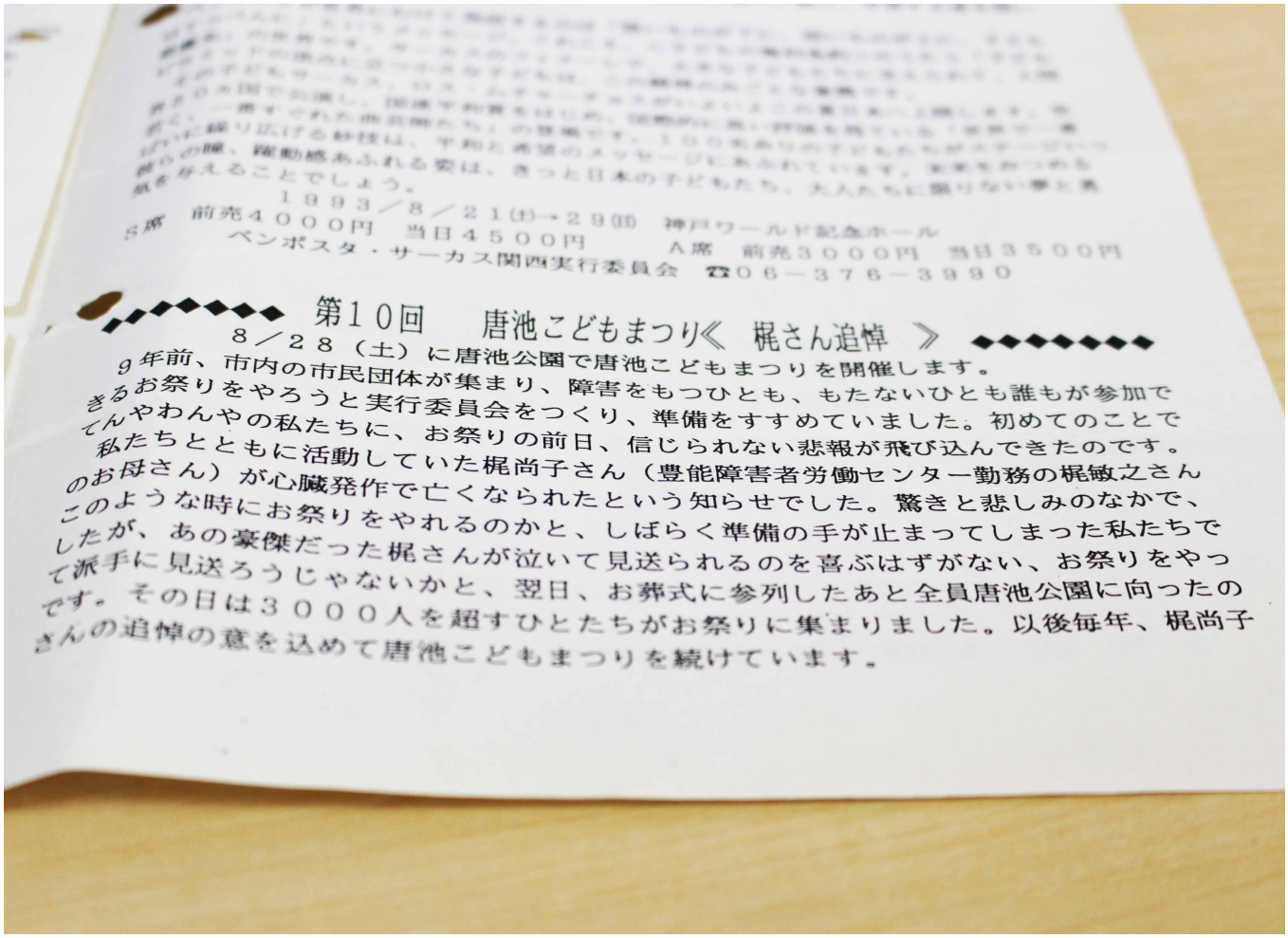
永田：うん。でもそういうことはいくつかあったりして。まぁ、私もその現場に直接関わっていなかったから、それをどうしたかまではちょっと知らないけど、「そういうことがいっぱいあったよね」という。

菊池：うーん。

永田：だから梶さんとお母さんは、中学校を卒業した後にわざわざ支援学校に行くのがいいとは思えないというので、市長なんかに「働かせてくれ」ってずっと働きかけて、やってはってんね。

細谷：それを市民会議が聞きつけて「そんなことを言うてる人がいてる」いうことで「話聞こう」言うて……。せやから市民会議はほんまに、障害者運動を作った団体。基本的な考え方なんやから。

(注 12) H さん：本人希望によりイニシャル表示。豊能障害者労働センターの元事務局長で重度障害者。現在は関東に移住。
(注 13) 五原則：「障害者の公務員採用検討に関する基本原則」として国際障害者年箕面市民会議が提案したもの。五つの原則の内容は次の 14 ページの通り。（『ささゆり通信』から転載）



箕面市で 1984 年から 2014 年まで 30 年間続いた「唐池（からいけ）こどもまつり」の実行委員会にも梶さんのお母さんは参加されていた。
最初期の『ファースト・ラン』３号（1993 年８月発行）でもお祭り当日にお母さんが亡くなられた時のことがふれられている。

障害者の公務員採用検討に関する基本原則

障害者の公務員採用にあたっては、一般公務員採用において、法令等に定められている諸原則のほか、障害者のおかれている社会的諸条件を考りょするとともに、関係法令、憲法、世界人権宣言、国際人権規約、国際障害者年行動計画等を規範として、次の５原則を総合的に検討するものとする。

●公共性の原則

障害者の公務員採用は、障害者の完全参加と平等を保障する施策の一環であり、とりわけ職業選択の自由、職域参加の権利、保障にかかわって、公共団体が先導的、啓発的役割を果たすべきであるという認識に基づく公共的な政策として位置づける。

●機会均等の原則

障害者の公務員採用はすべての障害者に対して、公平、平等でなければならないという認識のもとに、公募採用の方法（別わく）、試験方法、採用後の職種、職務選択等においては、障害者の態様、並びに障害者のおかれている社会的諸条件（被差別状況の多様性）に応じて多様な選択の機会を保障するものとする。

●福祉、能率的均衡の原則

障害者の公務員採用は行政民主化に寄与することを充分認識するとともに、行政全体の効率的運営との均衡が損われないよう充分に配りょしつつ、積極的にすすめるものとする。

●特別配りょの原則

給与、身分待遇等はすべて職務、職階別、並びに勤務条件に対応して、公平、平等に処遇されるべきであるが、勤務、就労条件もふくめ、必要に応じて特別の配りょが講じられなければならないものとする。

●共同、共労の原則

障害者と健全者が協同して公務遂行が可能な物理的、精神的職場環境の整備を促進し、障害者と健全者を分離するのではなく、共に働く職場を保障することとする。

以上の５原則にもとずき、採用基準を策定する、従って障害を理由とする差別は行なわない。

別枠採用と「つらい選択」

菊池：いや、僕もどこまで遡る必要があるのか分からないまま年表 (冒頭の『推進協のあゆみ』参照) を労働センターから始めたんですけど……(笑)。
細谷：市民会議から色んな話をするのが典型的でね。
永田：私も市民会議がなかったら今ここにいないですよ。
細谷：やっぱり「時代が変わった」言うても知っとかないけない、なんて僕は思うんです。
菊池：うん。
細谷：推進協の基本的な考え方の元になってるのは市民会議が作ったんです。
永田：そうそうそうそう。
武藤：俺は知らんよ。
菊池：ん？
濱辺：なんで知らんの！？
永田：ちゃうちゃう、忘れちゃっただけです。
一同：(笑)。
武藤：最初に豊能障害者労働センターができたじゃないですか。そのできた段階で河野さんが連れてきたんよ。梶さんを。で、「この人がここでやるから」って。アンタが知らん間に連れてきたんやんかと (笑) ！
一同：(笑)。
細谷:それはなんでやと言ったら、さっき言った市民会議で「別枠採用せよっ！」っていう初めての要求をナンボかやっとったわけやね。モデルとして豊中で視覚障害者の人のそれが成功してるから。梶さんもどちらかと言えば「梶さんを先頭に立てて！」って運動してて。
武藤：俺はなんの事情も知らんのですよ！
一同：(笑)。
菊池：なんの事情も知らないのに (笑)。
武藤：「忘れてる」じゃなくて「知らない」。
細谷:梶さんを先頭に立てて「この人を雇え！」とバンバカやって。
高岡：それは初めて聞いた。
細谷：古市さんがいて片方は梶さん。市民会議の要求はやね、主にこの梶さんを「就業させろ！」って交渉を言うたわけよ。ほんだら相手は理念で「なんとかせなアカンな」思うけども、まぁ、バリバリの脳性麻痺やしね (笑)。
濱辺：(笑)。
細谷：叩き上げやと (笑)。でも、なかなか現実として難しいところでね。市民会議の意向で職員組合の人達が入って行政とちょっとした交渉と調整をしとったからね。その中で「古市さんやったら市役所で雇ってええんじゃないか」ということになって。それはほんま市民会議にとってつらい選択やったと思うわ。その時ね、彼は要するに筋ジスだったけど、そんなに介護必要とせんわけやねん。
永田：車も運転してはったしね。

本文にたびたび登場、ニコニコ感に定評のある梶さん

細谷：もちろん職業的能力もあるし。だから梶さんはアカンけど……。
濱辺：みんなに、それぞれのドラマがっ (笑) ！
一同：(笑)。
細谷：その時に、行政は「この能力があったら、なんとか両方釣り合い取れるやん、国障年の時やし」とね。一応箕面市も障害者雇ったし成果になるやん。せやけど……彼は筋ジスやからどんどん障害が進むわけやんか。それのフォロー全然なかってんから (怒) ！
濱辺：怒ってるやん。
永田：(苦笑)。
小野：あのう、たぶん僕は市役所で数少ない古市さんの友達やったと思います。

濱辺：言うとったねえ。
小野：一緒に遊びにも行ったし家にも行った。何度か遊びに行きましたねぇ。
永田：古市さんが市に就職したあと、私たち、「のび」がサポートしてたんだけどね。
高岡：うん。
永田：ただ、やっぱり中途障害だし、結局自分で色んなことができるから、頑張り過ぎるというかね。
一同：うん。
永田：私たちは散々言うたんやけどね。「お昼に食堂にご飯を食べに行き！」って言ったんだけど、そのためには車椅子だから、色んな人に色々サポートしてもらわないと。今で言う「合理的配慮」的なものが色々要ると。
一同：うん。
永田：それが言いにくくて。古市さんはパンを買って行って職場で食べたりね。
菊池：う〜ん。
永田：そんなことせんとね、物を持たれへんかったら「『持ってください』って言ったらええやないの！」というようなことまで、散々彼にはサポートしたんだけど。
一同：うん。
永田：私らがサポートするのは、一緒に付いていってじゃなく相談事だったからね。結局、古市さんは職場でそれが言えなかったから。小野さんが友達でいていただいたというのはあったけど、やっぱり言いにくいという……。今の市の中で別枠採用した職員と、市の職員がどういう関係にあるかっていうのは、そういうところから学んで欲しいんだけど。やっぱり彼は孤立化していったね。
濱辺：今でもあるんやな。
細谷：市民会議はね、恐ろしい集団なんや。
一同：(笑)。
細谷：せやから市民会議の後押しで彼は就職したんだけど、やっぱりちょっと距離を置いとかなマズイなっていうことはあったかもしれない。「市民会議いうたら怖いとこや！」と (笑)。
一同：(笑)。
濱辺：そりゃあもぅ過激派集団や。一時ね、その、青い芝とか全障連とか 70 年代の闘いをやってきた連中が入っとるという噂が流れて……。
菊池：実際に入ってるんでは……。
濱辺：それは世間的によ。
永田：入ってたんは河野さんだけやん。
濱辺：「だけ」いうことはないやろ。
永田：だけやんかぁ。
濱辺：僕らお墨付きもうたもん (笑)。
細谷：(笑)。
永田：(笑)。

一般市民による国際障害者年箕面市民会議

濱辺：それがまた「流れ」のオモシロイところで！国障年ちゅうのは「ものすごく悪い」と言うた人もおるし、「これは使いものになる」と言うた人もおるし、千差万別やってん。で、箕面はセクト（集団）的、政治的な流れに与してないんですよ。大阪でも独立独歩。で、なんでそういうことができたかというと、総評の力が強かったんですよ。大阪総評って知ってます？

菊池：知らない……(苦笑)。

永田：はははははははっ。

小野：分からんでぇ(笑)。

細谷：無理無理っ(笑)。

濱辺：連合の前身で総評と中立労連と同盟と新産列と……。

小野：ぐははははっ、「三公社五現業」が無理やわ(笑)。

濱辺：要は「お墨付きくれた」いうのはね、初めて労働組合が「障害者と連帯しよう」と言いだしたんですよ。それを流したんです、全部。ほんなら真面目な組合ってありますやん。

永田：真面目な組合……(笑)。

濱辺：真面目な組合。

一同：(笑)。

濱辺：自治労いうたら地方公務員の労働組合ね。いっぱい変な奴おるけども大阪はまたちょっと、なんか裏があるけども。

永田：裏があるの？

濱辺：いっぱい裏があんねん。でも真面目やねん。とりあえず、そういう大きな組織が、労働組合が障害者団体を支援しだした。

菊池：うん。

濱辺：だから、箕面の市職……小野さんはここの人ね。それと教職員組合、先生。今はもうちょっとしかおれへんけどね、日教組言うたら今はかなり減ったみたい。

菊池：ふーん。

濱辺：そういう流れがあって。その流れちゅうのは 89 年、総評が解散する 92 年くらいかな？

細谷：組合は熱が入ってんな(笑)。

菊池：なんかディープな話になってきて(笑)。

永田：いつになったら推進協になっていくことか(笑)。

一同：(笑)。

濱辺：推進協はその間に挟まってますやんか(笑)。

永田：その国障年というのは箕面市の市の職員組合と、箕面市教職員組合両方が団体加盟してたんです。だから今も仰ったみたいにセクトで何かしてるわけじゃないんだけれども、市の教職員組合と……。

濱辺：いやいや、一応大会方針で決議してますのでね。

永田：(笑)、そこがね！国際障害者年箕面市民会議っていうのはわりあい色々網羅した形で団体組織をしていたんです。最初からね。

細谷：だから国際障害者年〇〇というのは大阪府でも全部あったんですが、今言ったような組合とか団体の集まりだったんです。せやけど箕面の特徴はね、永田よう子さんとかね、高岡さんとかね。要するにその普通の一般市民というか……。

高岡：一般市民です(笑)。

細谷：職域団体じゃなくて、「そこに住んでる人たちを中心にしよう！」というね。田舎やということもあったけど、それはけっこう誇れるもんやってん。

濱辺：僕だけでっせ。ネクタイ締めてたん(笑)。

細谷：だから、一番ラジカルやってん。「住んでるところでモノを考えよう」っていうんだからさ。逃げられへんやんか。

会社やったら家帰って「ちょっとこんなことあったけどな」で済むけど、そうでは済まへんやんか。ずっと繋がってるでしょ。
菊池：住んでるところと繋がってる……。
細谷：そのことで、障害者の親もずっと「生活者として」やってきた。今の推進協で言えばそういう「障害者の生活を支えよう」とか「サポートしよう」をやってますやんか、一緒に。国際障害者年は全国にたくさんあったけど、そういうのは箕面市民会議がただ一つと言うてもええと思うわ。
高岡：思うなあ。
永田：他はわりあい団体加盟みたいなのが多かったんですよ。
菊池：団体加盟？
永田：市職やとか教組やとか、組織的なものの集団が国障年というものを作っていたのが多いんだけれども、箕面は市民一人一人。だから教組や市職は入っていたけど、基本的には一人ずつ。濱辺さんだって「濱辺さん」として入っててね。
細谷：豊中なんかは教育運動みたいなところから、色々障害者運動とかあったけど、箕面は、教育はどちらかと言えば最初からあんまり良くなかった。
一同：(笑)。
細谷：せやけど、市民が入る形の市民会議っていうのはね、箕面だけやったよ。
高岡：そうやね。
永田：世界的に国際障害者年というものが始まるけれども、「それってなんなのよ」、「それをもっと市民として考えよう」というのが箕面の国障年なんですよ。
高岡：市民会議。
永田：市民として。
菊池：今なんか……やっと分かりました！
永田：「一般市民が入る」というのは箕面市民会議の基本的なルールなり、１つのキーワードなんですよ。だから私たちも入れた。私も普通に子育てしていた中で障害者問題に関わってて、濱辺さんの斜め前に住んでいたというだけで……(笑)。
濱辺：(笑)。
永田：だから、何かの団体に属して「国障年豊中」とか「国障年ナンタラ」とかいう組織するところはあるけど、箕面みたいに一般市民で「じゃあ入って考えてみようか」と間口を広くしてというのはわりあい珍しいと思いますし、逆に言えば、だから長く続いているとも思います。10 年とか 20 年とかいう時間の中で自然と解散されたところも多いけど。名前だけ残ってたりするにしても箕面はちょっと特殊性はあると思いますね。
濱辺：変な言い方やけど市民会議って「正体不明」やから、障害者事業所とか作業所が何かやる時の受け皿になれんねん。
菊池：「正体不明」やから？ (笑)。
濱辺：「正体不明」やからなんでもありや (笑)。
細谷：創成期にはそういう言い方もあるけどね。急にこれ言うたら意味分からへんと思うけど。
永田：ははははっ (笑)。
細谷：その後、ものすごい経ってから「その役割をしたのが推進協や」というところに話がいく。推進協にいった時点で、国障年は一定、役割を終えたようなとこがある。その時を引っ張った人はこの人やから。
菊池：武藤さん。
細谷：うん。
永田：ただ、今は倒れて話が繋がらない河野さんですら、こないだ話をしていたら、「永田さん、箕面の障害者運動の真ん中に国障年がないとアカンよね」っていう話をされたのね。
濱辺：お〜すごいなあ。
永田：「オッ！まだ繋がってるわ」て、その想いっていうのが彼の中にはまだあるんだと思うのね。現実的にどうかは別と

して、「国障年箕面市民会議」という名前があるってことは、それを作ってきた色んな他の団体に関しても、やっぱり「そのことが真ん中にあったからできたんだよ」っていうのは大事なことやと思うんです。河野さんの頭の中にもまだそれがあるんやから。

細谷：あの人は全国のジャーナリストやねん。意外と箕面でも知らん人おるけど。ジャーナリストとして「国際障害者年箕面市民会議」を一緒にできたことを昔からずっと誇りにしとった。彼は他のことは後からやったかもしれないけど「元は市民会議や」ってずっと言ってる。

1982 年　豊能障害者労働センター設立

細谷：武藤さんが「河野さんが急に梶君を連れて来た」って言ってたでしょう。その話のやり取りの中で古市さんが就職したわけ。そしたら梶さんが残っちゃたわけ。

武藤：俺の頭の中ではね、古市さんは一番最初に労働センターの代表やったけど、やめはったんですよ。

永田：市の職員になったからね。

武藤：河野さんが「あいつ (古市さん) 裏切った」と言いはったんですよ！

濱辺：わかるわかる (笑) ！

永田：わかるけどね (笑)。

細谷：結局、その時に市民会議で交渉して別枠採用で古市さんが入って、それはちょっとしたその時代の実現。なんとかすり合わせできるかなっていう交渉ね。その中で古市さんが別枠採用されて梶さんが残るやん。そやけど、あの別枠制度を作ったのは市民会議が作ったけど､梶さんのお母さんやで！河野さんが先頭に立ってボンボン言いよったんや。そやけど、河野さんは河野さんで偉かったとこは、分かっとってん。梶さんに「ど～も労働センターみたいなケッタイな（変わった）のができてるよ」って言って。

一同 : (笑)。

細谷 :「あそこ、梶さんにええかもしれん」と思とったみたいやで、本人が気に入れば。それを梶さん気に入りはってん。武藤さんの顔見て。「ここでええ」言うて (笑) ！

永田：労働センターができる話になるけど、国障年の前に色々学習会をやりながら、「来年、国障年を立ち上げるぞっ！」て言い続けながら、「こんなんやります」って、ずーっとあっちこっちに根回しをして３月８日にサンプラザで設立総会をやったんですよ。その時に武藤さんもおられて、その後の会議で「小泉さんが養護学校を卒業してくる」と、「で、受け皿がないので何かしたい」と言っておられたのが武藤さんなんですよ。それで、その時になんかするぞと。で、河野さんの家に枚方（ひらかた）障害者労働センターの粉石鹸が積みあがってて、豊能障害者労働センターっていうのができた。武藤さんが立ち上げるっていう話があった時に私は「国障年ささゆり」っていう国障年の中でお昼間にするグループを作ってて。で、武藤さんが立ち上げたいので粉石鹸販売を仕事にやるっていう話になって、じゃあ粉石鹸っていうのは私たち生活者にとっては身近な物なので協力するよって言ってね。それで私は立ち上げの時から労働センターと関わるようになったの。

濱辺：だんだん迫ってきたで (笑) ！

永田：で、桜井に労働センターができて、主な仕事は石鹸詰めやって。たこ焼き販売はもうちょっと後でね。

高岡：後かぁ。

永田：武藤さんが事務所の奥の二畳間に住んでて、夜になって寝ようとしたら天井に穴が空いてて「星が見えるよ」みたいな (笑) ！

細谷：たこ焼きは 83 年の 11 月にやってる。

永田：たこ焼きとおでんと。毎日おでんやってて。

大道：私ね、今、すごい嬉しいんやけど。何が嬉しいって、私、国障年の立ち上げとか労働センターの立ち上げとかそよかぜの家の立ち上げを知らなかったから、すっごい知りたいって思ってて！

一同：(笑)。

大道：新しく推進協に関わってる職員さんは知らん話やと思うけど、推進協ってこういう人たちが国障年というところをスタートに作ってきた、すごい魅力的なところ。で、私はこの場所で色んな人たちとお酒を飲みながら、あれこれ教えてもらって知ったから。私、今の推進協の職員さんにも「ようわからへん組織」って思いながらでも、「ああ、そんなふうに作ってきたんや」、「こんな人がいてるんや」ってことを吸収してほしいなって、すごい思ってるんです。

菊池：吸収してると思いますけど (笑)。

細谷：あまり要求しないでね (笑)。

大道：してない、してない！

細谷：とにかくねぇ、国障年箕面市民会議があったからこそ労働センターは持ちこたえられた。これは古い人はみんな良く分かってると思う。障害者団体というのはどうしても声高に言うても聞いてくれる人は少ないねん。「ここに居てるんですけどねぇ」言うても聞いてくれへんねん。だから、市民会議というところはさっき言ったように市民の集まりで「街はどうしたら豊かになるの？」と働きかけをしていく。その中で市民会議というのをバックボーンにして武藤さんはなんとかやってきてん。武藤さんは忘れてるかもしれんけど (笑)。

10 ページ「国障年の最強トリオ」のうちのひとり、小泉祥一さん。
豊能障害者労働センターの現代表。今日も市内を電動車椅子で爆走する！

永田：あのね、最初に労働センターから座談会をスタートするのに異議を申し立てたのは結局、国障年箕面市民会議っていうのがバックにあって、そこに武藤さんも「小泉さんと一緒に彼の行き場を作りたい！」っていうので「じゃあこうしようよ！」みたいなのは、やっぱり国障年箕面市民会議で話をしてるんですね。古市さんの事だって、古市さんが国障年箕面市民会議に持ち込んで、それを真ん中にして市との交渉をしてるわけじゃないですか。

菊池：うん。

永田：で、次に豊能障害者労働センターを立ち上げました。それと私たちお昼間のグループで、その時はサークル「ささゆり」って言ってて、その後「のび」と変えたんだけど、最初はささゆりというグループでね。「障害者は隣の畑を走ったらいかん」というのが困るというので、10 区画の畑を借りて「走ってもいいよ」というのを作った。その時に関わってたのが市の職員で奥山勉（おくやまつとむ）さん (注 14) なんだけどね。で、そういうことをやりながら「国障年箕面市民会議」というのが真ん中にあった事で労働センターだって色んな活動ができたし。

一同：うん。

(注 14) 奥山勉（おくやまつとむ）さん：箕面市の職員、副市長。(2016 年退職) 長年、障害者の活動に深く関わってこられた。

松内（まつうち）くんとそよかぜの家設立

松内さん（当法人が過去に主催した交流会にて）

永田：で、その次に、そよかぜの家っていうのができてきたんだけど。そよかぜの家も松内くん (注 15) が第二中学校 (以下、二中) を卒業するんだけども「行き場がない！」っていうので、どうしようかってなって。で、お亡くなりになってるけど、障害に関わりあっていた二中の西川（にしかわ）さんっていう先生が「労働センターに入れて」って言ってきはったんですよ。でも、なんでもかんでも労働センターじゃないやんと！で、ましてや西川さんは当然教組の人やから「教組が関わってるんだから、違う団体立ちあげたらいいやん」と言ってそよかぜの家ができた。だからそよかぜの家は数年前まで歴代教組の役員が代表を務めてきてるんですよ。西川先生は二中の先生でね、土曜日の午後になったら「キャベツ畑」(店名) でしょっちゅうお酒飲んでたけど (笑)。でも、ずーっと歴代色んな教組の人達が代表を受けてきて。その関連があるから、労働センターのやってるカレンダー販売は、教組の関係で学校の販売は労働センターが手を出さないでそよかぜの家がやってるとかね。色んなルールを作りながらやってきてるんです。

大道：えーと、武藤さんがそよかぜの家ができる時に「自分たちでパンを売りたい」と。それまでは豊中のＡＺからパンを仕入れて売ってたけど、仕入れではなく「自分たちで作ったパンを売っていきたい」ってなって作ったのがパンハウスで。で、パンを作る職人がいてないと。

細谷：パンハウスまで行ったら、そよかぜの家のほうをもうちょっと！

永田：あのね、大道さんは知らないかもしれないけど、そよかぜの家が労働センターと一緒じゃなく独自にしましょうって言った時に、でも教組っていうのは組合だから簡単に動けないだろうってなって労働センターからＹさんっていう方がそよかぜの家に出向してたの。別団体を立ち上げたほうがいいよってことでそよかぜの家になったの。そよかぜの家が助成をとったのは暫くしてからやね。

高岡：そうそう。

永田:いわゆる、今は事業団にいてる松内くんが二中を卒業して行き場がないっていうのでできたのが、そよかぜの家なの。で、ノウハウが分からんから労働センターのＹさんが出向してたの。だから、Ｙさんは２年ほどして労働センターに戻ってきたね。

部落差別と障害者差別

細谷：で、抜けてんのは解放同盟や！

濱辺：そう、解放同盟！解放運動！部落解放同盟！

大道：部落解放同盟。

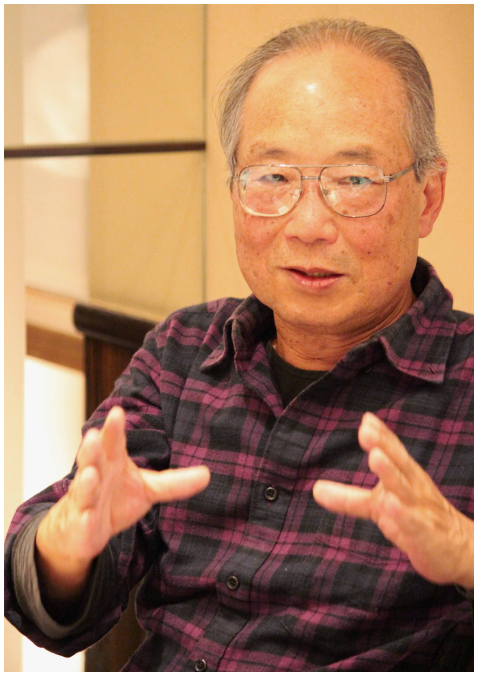
一同：(一斉にがやがや) ！

菊池：今ちょっと、話が重なって……僕がいっぱいいっぱい (笑) ！

永田：あのう、松内さんって方が部落解放同盟のとこの方なので、その事っていうのは団体としては押さえとかないと。

小野：北芝支部が初めて障害者運動に出会ったんやね。

(注 15) 松内くん：松内秋弘（あきひろ）さん。発達遅滞障害のある箕面市民。現在、障害者事業団職員。



濱辺：そう、あのう、これも裏があってね (笑)。
永田：裏ばっかりやん！
濱辺：これも、なんで解放同盟が部落差別のことじゃない障害者運動まで口出してくんねんって話になるやん、やっぱり。
大道：同じ解放やけどね。
濱辺：ところが、彼らはちゃんと分かってて。その部落解放運動だけでは行き詰まるやろうって分かってた。その解放同盟の中でも色々おるんやけど、やっぱり色んな差別、特に大阪ね。大阪の解放同盟は色んな差別受けてる人がいてんねと。我々だけが差別受けてるんじゃないということがあって。で、やっぱり支部としても何か取り組まなあかんと。それが、うまいことひっつくんやね。だから、一翼は教組がこっちにおったら、解放同盟がこっちにおって、それがうまいこと引っ付いたっていう話なんです。
大道：今年ね、人権協障害者部会で、「かたりべの会」っていうので、箕面市人権啓発推進協議会の事務局長の前田功（まえだつとむ）さんっていう方に話をしていただいたときにね、ご自身が被差別地域に生まれながら色んな人を差別しながら生きてきたけど、自分も差別する側だったことにびっくりしながら、ぐれて、今があるってことを話してくださって。一般的に言うたら「部落」って言うと、被差別的な地域ですよね。そこに生まれ育った前田功さん自身が障害者をさらに下に見てきた。自分は汚いと思ってきた。だけども、さっき話に出てきた松内秋弘さんと出会って、知的障害のある方とかかわりながら、そのなかで、汚いと思ってきた人物とか理念とかを取っ払って、「松内秋弘が困ってるのをなんとかしやなあかん！」という感情に変わったと。そよかぜの家ができる発端っていうのを教えてくれはって。部落差別される側、障害者差別される側だった二つの団体によってそよかぜの家ができるってこと。松内さんが部落出身者から、進学やその先を考えるときに、がちっとスクラムを組まないとこれはできない。部落解放運動、障害者解放運動、そこにやっぱり学校のこととして、教職員組合、市の職員組合のスクラムがあって。で、一枚、一口１万円の……。
小野：市民債券！
一同：市民債券。
細谷：こないだ引っ越しの時に出てきて。「なんやこれ？」って。
濱辺：ＺＥＲＯ（ゼロ）の家 (注 16) までやってたやん。
大道：900 万。一口１万を 900 口集めて、できたのがそよかぜの家。
永田：いっぱい持ってるわ。
大道：債券っていうのは、１万円払って１万円返ってくる。だけど、恐らくなんだけど、その一口１万円払う人達は１万円が返ってくるとは期待してない人たち。
永田：そんなん思ったことないわ。
大道：見返りのない自分たちの思いっていうのを、心を集めて作ったのが、そよかぜの家だったりＺＥＲＯの家。
高岡：河野さんが障害者運動に入ったのは、部落差別の人々が障害を持った人に対して差別があるって知って、「もっと下に差別がある」っていうんで入ったっていうのは聞いたことがある。それとちょっと繋がるのかなって。

永田：結局、そよかぜの家、たんぽぽもＺＥＲＯの家も他ダダダダ～っと、色んな物ができてきたんだけども、その一つ一つにやっぱり物語がある。
濱辺：そうそうそう！それが言いたい～。

小野：ポッとできたん違うよ～ていう。
永田：ポッと簡単にできたんちゃうよって。推進協だってそうやん。
濱辺：流れに乗ったけどもねぇ。
濱辺：国障年が 81 年でしょ。それから 93 年に推進協でしょ。そこからが、いわゆる作業所とか事業所が出てくるわけ。僕はその前段は闘う人たちをイメージしてて。
永田：闘う人たち。
濱辺：それから作る人たち、居場所を作る人たち、育ててそれを作る人たちが出てきて。で、次に何が来るかいうたら推進協やねん。「サービスが必要な人たちにどうするか」というね。それは必然なんですよ。今、事業所や作業所の変遷を聞いてたら。

(注 16) ＺＥＲＯの家：「ＮＰＯ法人　箕面東部自立センターＺＥＲＯの家」。1995 年に設立。当初は箕面市の助成を受けながら運営。2012 年２月に法人格を取得し就労継続支援Ｂ型事業所になる。リサイクルショップや印刷、文具販売などを運営。http://www.geocities.jp/npo_minoh_zero/

推進協の団体設立

菊池：一つ、ここで分かったのは豊能障害者労働センターやそよかぜの設立の中には「この人をなんとかしないといけない！」という思いが詰まっていたことがよく分かりました。
細谷：「なんとかしたい」じゃなくて「障害を持っている人と出会った」ということや。その出会いの中からそよかぜの家や豊能障害者労働センターができた。
永田：結局、一人の人生として考えて、保育所か幼稚園に行って学校に行って、学校を卒業した先もあるじゃないのと。生活全体のプログラムを作ろうという話になって、国障年はずいぶん前から「一人の人の生涯」を念頭に置いていた。義務教育終了後の行き場所、働く場がないということで「行き場所、働く場づくり」に一生懸命になったわけですよ。それで、労働センター、たんぽぽ、そよかぜの家、ＺＥＲＯの家ができてきた。一つ一つに物語があって、養護学校卒業後の行き場、働く場作りにずっと関わってきたんよ。その中で労働センターでは梶さんや小泉さん、Ｈさんの生活、主に介護の部分を全て労働センターが担っていたわけですよ。日中業務終了後に介護支援に入っていた。我々は地域での自立生活を推奨していたので、介護支援も積極的に行っていた。昼間は日中事業所職員で夜は自宅での介護支援者、日中の仕事が終わったら一緒に家に帰っていた。「今日は僕の当番だから仕事が終わるまで待っててね」と言いながら。でもそれは限界があるし、日中事業所職員と介護者が一緒というのは当事者からすると嫌だろうと。日中に喧嘩をするかもしれんし。なので、その人の介護や生活は適切に保障しないと駄目だという議論になった。職員にとっても当事者にとっても限界や支障がある。「生活を考えなあかん」と考え始めたところに、武藤さんが偶然フリーターやったんですよ（笑）！
菊池：武藤さんがパンハウスを辞めてやってきた。
永田：パンハウス勤務は２年で終わりと決めていたので、共同事務所という新大阪の事務所にいてはったんですよ。牧口（まきぐち）さん（注 17）の講演の送り迎えとかをして。床に穴が開いている車で（笑）、「この車、いつか停まらへん？」ってハラハラしてた（笑）！
武藤：そんなことありましたか。
永田：ありましたよ。「車が古くて床に穴が開いている！」と武藤さんもよく嘆いてた。
武藤：そうそう、道路で停まりました。
大道：当時、武藤さんは「パンは嫌いだけど、２年間だけパンハウスでパン作るわー」と（笑）。
武藤：今は好きですよ！
大道：で、２年たつと「２年契約だから僕は辞める」と。それから、「武藤さんをどうにかせねば」と周りがあたふたしだして、労働センターとそよかぜとパンハウスでいろいろ考えた。で、永田さんが言ったように当時、各作業所が障害者の全てを抱え込んでいたから、生活と労働を分けなあかんというわけで、「生活をちゃんと支える事業所」としてできたのが推進協ですよね。
武藤：ちゃうよ！そん時、俺ね、パンハウスを辞めて、することがなかったんですよ。することがないってことは金もなかった。「これは困った！」と思って河野さんに相談したんですよ。そしたら、そよかぜやパンハウス、労働センターとかが話

をして、「金を集めるから推進協を作ろう」ということになった。それが推進協の成り立ちなんよ。

一同：え〜っ (笑) ！

永田:それは本当なの。武藤さんの「救済対策」なん！ (笑)

細谷：いよいよ、推進協の話になってきたな (笑) ！

一同：ハハハハハ (笑) ！

細谷：行政交渉の話で言えば、最初は市民会議でしばらくやって、それから労働センターが主体になる時があって。その時に障害者事業団を作って。それから、いつの間にか、そよかぜの家が主体になって……そよかぜを作る運動で多くの人が集まって支援したのが 84 〜 85 年くらい。その中でＺＥＲＯの家ができる経緯もあった。たんぽぽもそうやね。それらのグループが共同して行政交渉や相互支援等を行っていた。そして、その中で、そよかぜの家が 91 年にパンハウスを作ったわけ。「僕はパンが好きだ」っていうのが僕の作ったコピーやったんやけど (笑)。そうやって運動を通じていろいろなものができあがった。でも、箕面に最も足らないものがあったわけです。障害者の生活支援がそう。東京の運動は生活支援から始まったけど。

永田：自立生活運動なので。

細谷：そう、自立から始まった。東京の方が障害者の生活を重視していた。東京は金もあるからね。24 時間の介護保障を訴えて勝ち取った。大阪は作業所や事業所なりの場所を作ることに一定の成果を上げていた。日中活動の場を作るで終わってた。そして、労働センターのように夜の生活や介護も全て引き受けていた。そのことについては労働センターもあまり声を上げなかった。「やむを得ない」と思っていた。そして、箕面で今、最も足りないものは何かという話になった。その時に河野さんは武藤さんの役割を考えた。特に理念とかではないねん。「武藤さんをなんとかせねば」と。

濱辺：箕面は理念が無かったんかい (笑) ！

永田：河野さんは武藤さんが新大阪にいるのが許せんかったんよ。

細谷：みんなで 30 万円のお金を出し合って武藤さんの活動資金にしようと。労働センターとそよかぜの家、パンハウスが 10 万円ずつ出し合って。それについては私と八幡さんとで、河野さんとかなり議論した。「この 10 万円は我々にとってなけなしの金。このお金には我々の夢がつまっている。我々がまだできていないことをやるためのお金。それをやるために武藤さんが必要。つまりは 24 時間の介護保障等の生活を支えるための活動を推進協が担って欲しい」と。今では介護職員を自宅に派遣するという制度になっているけど、当時はそんな制度を勝ち取ることが大事だった。その当時、箕面市にはそんな制度がなかった。

(注 17) 牧口（まきぐち）さん：牧口一二（いちじ）さん。「ＮＰＯ法人　ゆめ風基金（かぜききん）」http://yumekaze.in.coocan.jp/ の理事長。「障害者のイメチェンを考えて様々な活動をしてきたが、壁は厚い！ (本人談)」

24 時間介護保障

大道：私は今、朝９時から昼１時までの４時間、さらに夜の７時 30 分から 10 時の枠で身体介護を利用している。私の娘は今 19 歳。娘を産みたいと思った当時は「週２回、１回２時間」の介護しか利用できなかった。私が子どもを産む時は 24 時間の介護が必要だったのにそれぐらいしかなかった。「お金は出せないけど重要なので担って」と推進協に頼んだ。私と子どもの生活を支えてくれたのが推進協。言葉で言うのは簡単だけど、一人の人間を支えるのがどれほど大変だったか。１日の中で４、５人が関わりながら私の生活を支える。私だけではなく子どもの生活まで支えるにはどれほど多くの人の支援が必要だったか。私と娘の愛子（あいこ）の命と生活を支える、それを形にしてくれたのが推進協だった。

永田：推進協発足当時の文書には「推進協の発足プログラムが開始しました」と書いてあるんね。豊能障害者労働センターとそよかぜの家とワークランドが応援部隊として推進協を結成したと。生活支援のコーディネート組織を立ち上げなくてはいけないとの思いで。『ささゆり通信』(注 18) にそう書いてあるんね。国連・障害者の十年への提案でもある。武藤さんが「重度障害者に介護者を派遣することが必要だ」と行政交渉を行ってきた中で、奥山さんが国と交渉して、名称は不確かだけど「重度身体障害者介護人派遣事業」？ができた。その制度で３人分（梶さん、小泉さん、Ｈさん）の介護料が出た。しかし、介護料が出るようになっても推進協はまだ組織としては弱かった。で、私は当時、労働センターにいたけど、武藤さんから「手伝って」と言われて推進協に移ったんよ。

細谷：奥山さんが作った制度でお金が出るようになったのが 93 年頃かな。

永田：行政から補助金が出るようになって、その補助金を使って人を雇おうということで、武藤さんが私と当時のスタッフの東岡（ひがしおか）さんに声をかけて。で、私は労働センターを辞めて推進協に移った。その後で阪神淡路の地震が起こったね！

細谷：行政交渉について言えば、私たちは障害者の就労や所得保障を長い間やってきた。労働センターやたんぽぽとかで立場が違っても箕面市独自の作業所助成制度も勝ち取ってきたわけや。その制度も現在は廃止されたけど。しかし、行政も夢を持ってその制度を作った。その流れがあった後、93 年の交渉では「24 時間保障を実現するまで我々は一歩も引かない」と強く訴えた。それまでも「24 時間保障」とは記入していたけど、役所側も「これは書いてあるだけの見せ金で主要求は作業所補助金の増額」と捉えてた。ところが、93 年には不退転の決意で「24 時間保障」を要求し、「これを認めなければその先の話をしない」と主張したら行政も驚いた。行政を本気にさせたのはその時。作業所の運営も厳しかったけど推進協に夢を託して必死に訴えた。「これは見せ金ではない。すぐに実現しなくてもそのための議論をせなあかん」と。それから奥山さんの制度創設もあり少しずつ実現してきた。

永田：奥山さんが東京に何度も行って情報収集してくれた。ただ、「身体障害者等」の「等」がなかったため身体障害者しか使えなくて不自由な思いはしたけど、補助金ができたので推進協の組織も少しずつ大きくなっていった。前号のファーストランの坊野さんの記事で「これまであまり労働について考えてこなかった」とも書いてあった。けど、推進協が労働をどれだけサポートできるかというより、その前提として推進協は主に生活を支援する組織だけど労働の制度についてもきちんと把握しておく必要がある。今の事業所制度について推進協の職員がどれだけ知っているかちょっと疑問やな。「生活と労働」と名乗っているから労働ではなく、「一人の人生全体の支援」ということで活動する。学校出たら働く。そのことを担っている推進協は労働の制度もさらに理解してもらわないといけない。

細谷：推進協の名称についても最初はかなり議論した。河野さんは「作業所ネットワーク」でいいと主張してたけど、それを僕らは今の推進協の名前にした。「生活だけでいい」とは考えなかった。労働と生活は切り離せない。それで、推進協もけったいな長い名前になった。新しく入った職員さんは「なんでこんな名前なの？」と思うかもしれないし、坊野さんが記事で書いたのもよく分かる。「生活と労働」なのに労働をあまり取り上げていなかったと。

永田：かつては箕面市行政に対して「『労働に軸足を置く』と言ったではないか」と強く訴えた。「働く障害者」を重視しているのかと。これは箕面の強み。他では「就労継続」と言いながら、「就労」という名前がつきながらどこに労働があるのかわからない作業所が多い。「労働者ではなく利用者ではないか」と感じるところが多い。たんぽぽが作業所ではなく社会的事業所を選んだのは、作業所の「職員と利用者」という関係に疑問を感じたから。「私たちは『共に』と言ってきたはずだ！」。今の総合支援法の対象ではなく、ものすごくしんどい思いをしながら社会的事業所を続けているわけですよ！その根底には箕面市の障害者運動の流れがある。総合支援法に沿って就労継続Ｂをすればたんぽぽの運営はもっと楽になる。しかし、障害者の労働に重きを置いているから社会的事業所を続けている。それを支えたり応援したりするのが推進協の役目。ところが、最近はかなり変わってきたよね。

菊池：えっ……(冷汗)！

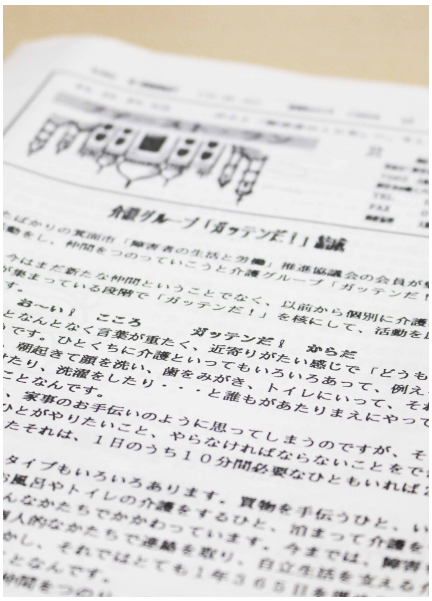
一同：ハハハハハ(笑)！

濱辺：今日はそういう（推進協につっこむ）場じゃないねん(笑)！

大道：私自身は、「労働のことは考えず、まずは生活だけ考えればいい」と思っている。たとえば高田浩志さん(注 19)。事業団に勤務して職場内では支える体制ができている。でも、体調不良で自宅で休むとなると誰が介助に入るのか。そういった緊急時の介護体制確保が課題になっている。「緊急時に頼れるのは家族しかいない」という現実もある。なので、理念で

(注 18) ささゆり通信：国障年の通信。
(注 19) 高田浩志（たかだひろし）さん：一般財団法人 箕面市障害者事業団で現職。重度障害のある箕面市民。『事業団だより』の中で『Viewpoint（ビューポイント）』を長年にわたり連載中。事業団の公式サイト内で閲覧可。http://www.minoh-loop.net/

言えば労働と生活両方に軸足を置いて欲しいと思うけど、推進協がその人の生活を一緒に考えるだけで、実は労働も考えることに繋がっているんじゃないかなと。
一同：う〜ん……。
高岡：経済的な自立も大事だが、それ以前に生きていかなくてはならない。
小野：24 時間介護保障のベースはそこやね。
細谷:でもね､違う観点から言うと､行政の言う「障害者」と我々のようなややこしい集団が言う「障害者」は全く別物。我々が言うのは「企業が拒む障害者」。働く権利も働く義務も日本国憲法には書いてあるやんか！それなのに障害者は除外されてる (怒) ！かつての学校教育と同じように｢あなたは来なくていい｣とされてる。そういった方々が僕たちの友達の障害者。行政が言う障害者はどうも「働ける障害者」やねん。
大道：｢上手いことできる障害者」やね。
永田：箕面市の障害者事業所の制度っていうのは対象は「職業的重度障害者」なんですよ。一般企業では働けない障害者が雇用されている。それで｢最低賃金をクリアする収益を上げろ！｣と言われているわけ。ものすごく矛盾している。だけど、障害者にすれば「労働に軸足を置く」ということで大切な制度。この制度があって「障害者も労働者だ」という旗印を掲げて我々も続けることができている。それでも、職業的重度障害者の仕事保障にはいろいろ難しい面があるよね。皆がどう考えてるかね。
細谷：大道さんが言うように、推進協は生活を一番に考えてもらわなければ困る。生活を考える時に根底にあったのは「学ぶことも働くことも生きることも拒否されている障害者」の問題。そんな障害者も箕面市民として普通に暮らせて当たり前ではないかと。このような理念を武藤さんが中心にいた推進協が広めていった。だからこそ、市民会議が担っていた役割を推進協に委ねた。市民会議の根本理念を引き継いだのが推進協。
大道：大きいよねぇ。
細谷：武藤さんは「そんなこと知らん！」って今は逃げてるけど (笑)。武藤さんも当時、我々や役所の人たちにそのことを強く訴えた。それが推進協の始まりや。
永田：だから、今でも推進協が対市交渉の中心にいるんです！それを理解してる職員がどれだけいるか (笑)。
高岡:私ね､当時の 24 時間保障は｢すばらしい！｣と思って。これは将来､事業所になってお金儲けもできるのではと一瞬思ったんだけど……、運営は中々しんどそうだね。



推進協がまだ任意団体だった頃の介護グループ「ガッテンだ！」。参加していた高岡さんが当時の資料を持参してくださった。
資料にも『ファースト・ラン』２号（1993 年５月発行）にも共通して書かれているキャッチコピー (？) は
「おーい！こころ　ガッテンだ！からだ」。

Hさんの話

永田：小野さんの出番が少なすぎたね。
小野：まだ（僕のいるとこに）行ってへんもん。１個だけ言えるのは、この年表（あゆみ）は 1982 年から始まってるでしょ？ 81 年までは「ホームヘルパー」というのは生活保護世帯などだけが対象やったんです。家庭奉仕員。82 年からそれを一般家庭にも広げたんです。で、そこから推進協設立が 93 年で、2003 年の支援費まで、この 20 年間。これがたぶん介護保障の 20 年。それこそ、この人ら（座談会参加メンバー）が毎年交渉して、ちょっとずつちょっとずつ 24 時間に近づけていった。ほんまちょっとずつ。１時間とか２時間とかね。その積み重ねだったんです。で、推進協ができて、支援費までいったら、ある程度 24 時間保障が、介護保障が具体的に見えてきたんじゃないですかね。それでもまだ十分じゃないですが。
濱辺：つなぎ１時間２時間言うてたもんね。
小野：ですよね。なんとか、隙間をあけつつ、24 時間なんとかつながるような取り組みが支援費まで積み上げられた。でも、国の財政的には支援費はちょっといき過ぎたんで、また反動があったんやけども。たぶんこの最初の 10 年と次の 10 年、で推進協ができてからはだいぶ違うようになったのは確かです。推進協ができるまでの 10 年は、ほんまに綱渡りでしたから。たぶん、Hくんがこの時に登場するんかな？その時に僕らは、介護調整とか介護者集めとかを必死でやっとったんですね。
永田：小野さんはHさんの介護にも入ってくれてはったんです。
濱辺：変な人やろ (笑) ！
大道：時給もないのに、泊りとかつなぎとか。
小野：制度の話をしてるのに (笑) ！これはさっきの話、１日２時間とかそんな時代。「あとの 22 時間どうやって埋めんの？」って話。だから、障害者が必死になって介護者を集めとってんね。それのモデルがたぶん入部（いるべ）さんですよね。
濱辺：入部さんの説明わかってる？
永田：入部香代子（かよこ） (注 20) さんね。
菊池：お名前は知ってるんですけどね。
細谷：座談会が終わったら、後はウィキペディアで調べたらね (笑)。
小野：当時の自立支援の介護者いうのは、どうやって介護調整するかだったんですね。穴が開く。これを誰が埋めるっていうのを、みんなこうやって集まって、「う〜ん」って悩んで、「俺行くわ〜」とかやっとってんね。
大道：いち職員として、自分たちの推進協ができるプロセスをいろんな人たちが担ってきた、という歴史を知ってほしい。
小野：僕は推進協に全然関わってきてないですよ。
大道：小野さんは推進協じゃなくて、箕面に関わってきてますよね。
小野：Hにしか関わってきてへん。
菊池：Hさんはどういう方なんですか？
永田：豊能障害者労働センターの元事務局長で、脳性麻痺で、箕面市のいわゆる車椅子住宅にも入っておられて。
小野：ささゆり園の自動ドアを３回ぐらい壊してん (笑) ！
細谷：ちなみにね、彼が箕面に来たのは、茨木の養護学校を卒業して「わらしべ園」にいてはったんですよ。小泉さんが同級生やってん。今、「支援学校」と呼んでるけど。茨木養護学校の。ほんでな、濱辺さんがその頃勤めとった所に車を停めて、毎日曜日に労働センター創成期にな、カンパ活動やっとってんな。カンパ活動やる中で……この人らひどいよ。「カンパにはもうちょっとインパクトあったほうがいいな」て思ったんやろな。「誰かいてへんか？」って言ったら小泉くんが

「いてる。」言うて、Hくんいう人を引っ張ってきてん。

濱辺：カンパ活動やっと出てきたな。

細谷：そうそう、それは置いといて。引っ張ってきたために、引っ張ってこられた以上「俺のことどうしてくれんねん」と思ってるわな、Hも。それで、24 時間介護保障の必要のある人の自立生活を箕面で初めてやってん。僕も犠牲になってん (笑)！

永田：対市交渉で行政職員の机をバーンと叩いたりしてたのは、Hさん。

小野：一番過激やってんね。

永田：小泉さんも梶さんも机を叩くようなタイプではない。Hさんがガーっ！て車椅子を前に寄せて夜中の 1 時や 2 時にガーン！と叩いてた。私たちの対市交渉は夜中の 1 時 2 時までやってん。

小野：介護者を集めなあかんから、例えば今の阪大、大阪外大の文化祭にHくんに連れられて一緒に行くねん。チラシまくねん。ダーってまいて、女の子ゲットするねん。女の子ゲットしたら、あとから男がついてくるねん (笑)！

高岡：そうやった (笑)！

永田：Hさんの基本的な介護仲間はいっぱいいたんだけど、やっぱり間が空く時があんねん。それを推進協が埋めてて。私も行ってたし。

高岡：私も入りました。つなぎでね。

(注 20) 入部香代子（いるべかよこ）さん：「青い芝」などで活動。1991 年 4 月「全国初の車いす女性市議会議員」として当選してから 4 期 16 年、豊中市議会議員をつとめたことでも知られている。2013 年に永眠。

障害者がいるから推進協がある

大道：20 数年前に立ち上げから関わってきて、私自身も右手右足がない障害者で、私も今の生活は健常者に支えてもらってるけど、支えてもらってる私も、実は障害者を介助していた時代があるんです。そのことは推進協にちゃんと知っててほしいなと思っていて。24 時間介護が必要やったHさんの夕方仕事から帰ってきて泊まりの人が来るまでの間の時間、つなぎの時間に私がいて、「タバコ吸いたいから火つけてくれ」「お酒飲みたいからお酒ついでくれ」っていう、障害者が障害者をサポートする。

高岡：でもそれは豊能障害者労働センターでもやってましたよね？みんなで支えてるからね。

大道：制度化されることでそのことは排除されるんだけど、でも人として生きる中で障害があるとかないとかは別にして、「できる誰かができない誰かを担う。できないと言われながらもできることを担う」ってことを形作るのが、推進協がやってきた歴史の根源かな？と私は思っています。

永田：推進協に限らずね、箕面の障害者運動っていうのは、労働センターだろうがどこだろうが「何かが足らない」ということを市民がサポートした。今、推進協はグループホームを普通にされてますけれど、グループホームの元々の発端っていうのは「のび」なり、いわゆる「障害者の生活を考える会」みたいなものがあって、そこでいろんなシュミレーションをしながら、それこそカンパ活動もしながら、それを形としたのが推進協なんで、推進協がポンと作ったわけではない。

高岡：グループホームは自立という面も含めて「生活を支える部分がなんでないねん？」っていうところで、国際障害者年箕面市民会議の「のび」のグループの面々が「おかしいやないか」と。「グループホームを作ってほしい」と。それでそこから始まって動いたのよね。

永田：元々はね、自立生活というのをずっと追いかけてきてたから、小泉さんだって元々は自宅から来ていたわけだし、梶さんだって自宅から来てた。それを全部自立生活に結び付けてきた。誰がっていうのは、みんなでやってきたわけだからね。それの延長で生活を考えるというグループができて、そこでいろんな検討会をやりながら「グループホームというのもあるんじゃないの？」と。「一人で生活するのがいい」っていう人もいるけど、「グループでならできる」って人もいるよねっていう話の中で、推進協はそれを担う形。その会議にもずっと武藤さんも来てはって、推進協ができる前からそのグループはあったのよ。

大道：私、推進協に対しての思い入れって強いものがあるんだけど。特に、今日話をしてくださった歴史を知らない人たちが増えている中で、推進協の利用者として、とにかくお願いしたいことは……。

濱辺：利用者ちゃうで、理事やで。

高岡：利用者でもあるけど、理事でもある。

大道：社会的な、無意識的な立場の中で、利用者。提供する側、利用する側っていう、無意識の意識っていうのは、常に人の中で働く中で、私は利用者であります。無意識的に働く下で、私も誰かを支えることができる。私自身が介護者になれる。その自分は誰に支えられている？と思うと、自分ひとりでは生きていけない。すべて誰かに支えられてしか生きていけないし、なおかつ、私ですらも誰かを支えていることがある。私が伝えたいのは、「上にならんでもいい、下にならんでもええ。共にでかまへん」というのをとにかく推進協に知ってほしい。サービスを提供してあげてるでもなく、してもらってるでもなく、与えてるでもなく。言葉は悪いけど、ここにいる推進協の給料は誰が出してるの？「障害者が共に生きる

働く」ということを支えている人たち、その人たちが払ってるよね？「障害者がいなければ推進協は成り立たない。決して、誰かが負い目を受けるわけでもなく、それが私たちの望む世界である」ということを確認したいなと思ってます。
武藤：障害者がいるから推進協があるんですよ。
大道：そうですよね。
高岡：でも、簡単に言うと「世の中は何でも持ちつ持たれつ」。なんでもね。
大道：そう！その一言に尽きるんですよ。「お互い様」ってね。
菊池：一人では絶対生きられない。障害者とか健常者とか関係なく、やっぱり誰かと関わりながらじゃないと人は生きられない。そういうことかなと。

夢をつないでいってる人たち

細谷：少し違うこと言ったら怒られるけど、僕、大道さんの話な、推進協ができる前。無償介護やったら、例えば「東京の落語聞きに行きたい」とか言ったら、障害者運動の介護に来るやつは大学生でさ、頭の中、障害者運動の理念しか持ってへんから「落語がなんだ！そんなもの行かんでもええ！」と言われてな。
大道：タバコもそうよ、今は。
細谷：大道さんは言いはったけど、「有償介護でないとダメ」ってはっきり言ってん。立派なことやん。だからいいねんて、今の話が。やっぱりちゃんと対価を払って、「私は好きな所へ行きたい」てあたりまえのことを言うたんよ、介護者に。なんらかの形で自分が出すか誰が出すかは別にしてさ、「ちゃんと有償であるべきや、有償介護を実現しなあかん」ってあなた言うたやん。それが色々あって、みんなの苦労の中できたやん。その中で、今あなたが言ってるのは、それはまた違う意味で正しいわけやん。僕も推進協にはすごい想いがあんねん。たぶん、永田よう子さんもものすごい想いあると思うわ。もう「夢をかける」言うかな、(声をひそめて) ほんまに言うとくけどな、あの頃、労働センター 10 万って大変や。もうむちゃむちゃ貧乏。もう話なれへんけどね、「絶対出す」言うてん。みんなですごい話し合ったよ。これはな、Hさんとか小泉さんが労働センターを離れても、市民として絶対必要やねん。
大道：そよかぜの家も 10 万、ワークランドも 10 万。それはもう……。
細谷：みんなすごい想い持ってな。その想いって何かっていえばね。これは意見ではないけどね。推進協はなにも、介護派遣事業団体ではないねん。僕今でも推進協にものすごい想い持ってます。だから推進協の人に「労働センターとか色んなとこでやることにも関心持ってきてくれへんか？」ってね。その代わりに、推進協がやることにもちゃんとみんなで参加する。最初の頃はお金もなかったし、制度もなかったけど、ものすごい想いを持ち合っとってん。「両想い」だったの、ちゃんと。障害者の生活をちゃんと支えるには、このネットワークがみんなで力を合わせなアカンいうことを初代の人たちは知ってるわけよ。労働センターとそよかぜとパンハウスが 10 万ずつ出してな。それは河野さんの強引な力やろうけど。それでも、労働センターにとっても痛い 10 万やったけどな。そやけど、飲み食いの 10 万とは違うわけよ。もう、ものすごい夢を持つわけよ。なんでか言うと、やっぱりひとつの集団がなんか運動をやるときは、未来永劫その運動が広まると思って普通はできひんよ。すぐに壁にぶつかるから。だから可能性の限界みたいなのがあるねん。働くということでやってる限りはな、生活のほうにはどうしても行かへんわけよ。そやから、むっちゃむちゃ夢を持ってやっとったわけよ。それがその 10 万やってん。
菊池：う〜ん。
細谷：そのことの元になってる働く場はどうかって。働く場はガタガタやで。今の現実！今、国際的に見ても日本の障害者の労働なんて全く保障されてへん。全く変わってないねん！どちらかと言えば。生活を支えるのは進んでるように見えるけどな、本当は進んでないって。でも、「進んでないことはいけないことではない」ねん。夢をちゃんと持てるわけやんか。だから推進協というのは半分は僕らの夢でできてる。さっき言った市民会議から引き継いだ、障害者市民の「一人の人間の人生を輪切りにするな」とかさ。その人がいつの間にか箕面からいなくなってしまったとか、僕らいっぱい経験してんねん。労働センターにいた重度障害じゃない人や事業団でバリバリやってる障害者が、「あ、なんでいてないの？」言うたら、「いやちょっと北摂の療養施設入った」とか、そういう目になんべんも遭ってるわけやんか。そんなことがないようにって想いがな、僕らみんなにあるわけよ。だから、例えば労働センターでやっとった人がうまくいかんからたんぽぽ行ったとか、そんな形でいいわけよ。どこかがその受け皿になって、その上で最後に出てくるのが推進協やねん。ほんまに市民生活をちゃんとするって、全く実現できてない言うてもええねんよ。だから一番身近にいるのが推進協やねん。それは持っといてもらいたいねん。派遣事業ということで物事を考えるのではなくて。

菊池：……。
細谷：ひとつだけ、武藤さんのことで言うたらあんまりよくないけどな。こういう運動というのは、必ず制度の中だけで済むんやったら運動とちゃうのよ。それをはみ出すことがあるねん。あの時、武藤くんがこう言いよったよ。もう亡くなったけど、若竹さん（注 21）の時にさ。あの時にはまだ制度的に実現してへんかってん、二人介護が。それで武藤さん「制度がなくても推進協でします」って、言いよってん。
細谷：風呂介護とかな、二人介護を実現せぇへんかったら、若竹さんの生活が実現せぇへんいうのがあったんや。

(注 21) 若竹さん：若竹育子さん。筋ジストロフィーの重度障害者。2006 年～ 2011 年に当法人の理事長を務めていた。2015 年に永眠。https://www.facebook.com/ikuko.wakatake

大道：そういえば近年、障害者が生きにくいなと思うのは、いうたら一言なんですよ。「責任の所在」。誰が責任を負うねん！ということ。問い詰めてきた部分と同じく、自分たちに返ってきていて、推進協は何かをやりたいと思う中で、問いただしてきたことと同じぐらいの誰が責任を負うねん！ということをすごい問われてる。たぶん事業所も B 型も。
細谷：僕、労働センターを一番愛してることは愛してるけど……それはそこにおったからしょうがないけど……推進協もいまだにその時のことと同じように……推進協はやっぱり箕面の夢ですよ。
濱辺：それ言われたらしんどいやん。
細谷：しんどいかもしれんけど、言うとくけど。推進協っていうのは、ほんまにスタッフのあなたたちもわかると思うけど、全国、特に大阪で見たら、燦然と輝く存在やで。間違いなくね。だからこそね、それを重荷に感じるのではなくて、「自分たちは夢をつないでいってる人たちや」っていうのをね、誇りを持っていただきたいんです。

●第一部あとがき

座談会中、参加メンバー皆さんの熱い想いに、僕らスタッフは圧倒されっ放しでした。後半は、特にお酒もたくさん入って、熱気上昇しています (笑)。1981 年に国際障害者年箕面市民会議が設立してから、箕面での障害者運動が一気に高まり、制度も保障も何もない中で市民が一丸となって障害者の生活や働く場を勝ち取っていった歴史。そんなに遠い昔の話ではないのに、制度ができた時代しか知らないスタッフからすると、なんだか遠い昔の夢のような話に思えてしまいます。しかし、それは夢ではなく、ちゃんと今に至るまでの歴史なのです。さて、次号では第二部「措置制度～支援費制度～現在」へと時代は流れていきます。参加メンバーも変わり、当法人の設立時から制度ができてから現在までの話になります。お楽しみに！

進行／菊池康治
編集・レイアウト／菊池康治・坊野一乗
撮影／坊野一乗・大野永美子
記録／小山加代・坊野一乗・大野永美子・福永英司
書き起こし／菊池康治・小山加代・坊野一乗・大野永美子・福永英司

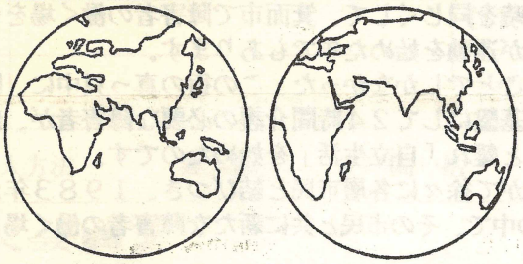
●特別収録『ファースト・ラン』１号（１）

2017 年、ついに 100 号を迎えた本紙の振り返りとして 1993 年３月８日発行の『ファースト・ラン』１号を特別収録します。今号特集の座談会でも語られていた頃の空気が感じとれます。当時はＢ５サイズで今よりも小さな冊子でした。

KSKQ 第三種郵便物認可 (ファースト・ラン1) 通巻第379号 1993年 3月 8日(1)

ＫＳＫＱ ポスト「障害者の１０年」へ、そして未来へ！

ファースト・ラン 1 編集



箕面市「障害者の生活と労働」推進協議会
〒562大阪府箕面市箕面4-2-16
障害者の働くバンハウスワークランド気付
TEL 0727-23-4826
FAX 0727-23-5187
郵便振替 大阪9-116066

一九九一年九月三日 第三種郵便物認可 毎月一回（二・四・六・八の日）発行

箕面市「障害者の生活と労働」推進協議会 正式結成！

昨年からポスト「障害者の１０年」に向け準備を続けてきた箕面市「障害者の生活と労働」推進協議会が１９９３年２月１日ようやく正式結成しました。推進協を構成する各団体・個人がそれぞれに問題を山積させているわけですから活動内容については様々な意見が出たのですが、やはりこの１０年で殆んど進んでいない自立障害者への介護保障、新たに自立しようとしている人たちの応援体制づくりを中心に取り組んでいくことになりました。財政については会費で運営していくのですが、各団体ともギリギリの状況で会費を捻出しており、当然行政施策の立ち遅れが推進協の設立を余儀無くしたわけですから推進協自体が一刻も早く公的助成金を獲得する方向で進み、又、行政の持つ福祉システムを点検し、公的介護保障の考え方、有り様を双方で確認する形で市と折衝していこうと考えています。

○○○○○○○○○このゆびとまれ○○○○○○○○○

○ 私たちの運動はある意味で障害者市民・老市民にとって夢のような○
○或いは無謀な行為に思えるかも知れません。箕面市が「ライフプラザ○
○計画」「福祉公社」など数百億円という巨額の予算をかけても見栄え○
○の良い「器」しか作れない時代に、誰もが「あたりまえ」に暮らせる○
○街づくりをしようというのですから。しかし、本当に不十分であるこ○
○とは認識した上で、多くの市民とスクラムを組んだ運動は何も無かっ○
○たこの街に事実として障害者の働く場を作り、そして、さらに増やそ○
○うとしているのです。一人でも多くの市民がスクラムに加われば夢は○
○現実となり、無謀な行為はあたりまえの行動になっていくのです。ぜ○
○ひとも私たちと共に夢をむさぼり、この街を変えていく仲間になって○
○いただけるよう心からお願いいたします。 ○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

●特別収録『ファースト・ラン』１号（２）

表紙の裏は団体結成の趣意書になっていました。会員の加入申込書が一体になっており、広く応援を呼びかけていました。本紙の座談会でも語られていた国障年箕面市民会議についても冒頭で述べられています。

KSKQ 第三種郵便物認可 (ファースト・ラン1) 通巻第379号 1993年 3月 8日 (2)

趣意書

１９８１年は国際障害者年であり、時を同じくして、箕面市で障害者の働く場を作ろうと障害者市民を軸とした、私たち市民が運動を始めた年でもあります。

障害者が働くことなど、「特別」なことでしかなかった、この街の真っ只中に、障害者の働く事業所をつくり、そしてそこを基盤にして２４時間介護の必要な障害者が、健全者には要求されない「決意」をし、家族と離れ「自立生活」を始めたのです。

点として生まれた小さな運動は、やがて徐々に各層市民と結びつき、１９８３年から始まった国連「障害者の１０年」の時間の中で、その市民と共に新たな障害者の働く場を作っていったのです。

そして、多くの市民の力は、座して動かなかった箕面市行政をも揺らし、１９９０年に全国で初めて、障害者を雇用するための団体「財団法人・箕面市障害者事業団」を設立するに至ったのです。

これは「市」という行政にとっては末端単位のことであり、しかも多くの問題を残してはいますが、行政が障害者の労働を、「生きがい対策」としての「授産」から「賃労働」としての「労働」へと、意識はともかく、具体的な形として転換したという面で、私たちの運動は大きく前進したと言えるでしょう。

しかしながら、私たちの運動がいかに全力疾走してきたとは言え、たかが１０年程度の積み上げだけで、歴史という時の長さが蓄積させ、多くの人々を踏みつぶしてきた「差別」を霧散させることなど到底できないのです。

確かに、この１０年で事業所や作業所ができ数も増えました。が、そのどれを見ても、未だに障害者の生活を支えるだけの賃金をつくり出せてはおらず、全体の賃金を抑えることで維持しているのが現状です。

又、この１０年の間に介護を必要とする者で、家族から独立し「自立生活」を始めた障害者は極めて少ないし、「自立生活」を続けている人たちの介護体制は、いつ崩壊しても不思議ではない状態にあるのです。

たった一人の障害者が差別とあらがう「決意」をもってしても、「自立生活」を始められない。この悲しい現実を。「普通」という言葉で歪められてしまった「あたりまえ」をもう一度認識し、確認しなければなりません。

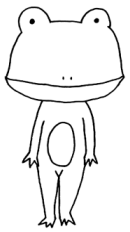
そのことが、ポスト「障害者の１０年」に向けて、私たち市民が動きだす道しるべとなるのですから。「あたりまえ」を取り戻し、障害者が、或いは全ての人が「決意」などしなくとも、ひととして暮らせる未来を具現し、具体にするため、私たちは新たな提案をします。それが箕面市「障害者の生活と労働」推進協議会なのです。

私たちには人的にも資金的にも全く余裕などありません。しかし、だからこそ今、着手しなければならないのです。たとえ、それが血のにじむような資金で運営しなければならないとわかっていても・・・。

多くの仲間と、そして、これから出会うだろう仲間と共に現在を変え、未来を創造するために、私たち市民のファースト・ランを！！！

カエルのうた

其の 14 ～思い出の人



思い出の中に強烈に残っている障害者が何人かいる。何年も前に亡くなられたのだが、親しかったので頻繁に思い出す。

Ｋさんは作業所の運営をされていた。ある時大阪でイベントがあった時にお会いした。にこやかに私に向かって帽子をとり、挨拶をしてくれた。帽子をとればすぐに自分と分かると思われたのだろう、サプライズのように私の前で帽子を取りニコッとした。人の顔を覚えるのが苦手な私は、申し訳ないが「誰なんだこの人」と思ってしまった。私の態度でそうと分かったのだろう、Ｋですと名乗ってくれた。名前を聞いてハッと思い出した。なんでも忘れてしまう私だが、その時のことは覚えている。

Ｉさんは豪快な人だった。その人の講演会があったので、運転手として付いて行ったことがある。その人は前日にかなりのお酒を飲んだらしく、車の中で爆睡している。これから講演会が待っているとは思えない。２時間ほどの道中ずっと寝ているから「大丈夫かな？」と思っていたが、着くとしゃきっとして喋っている。しゃきっとと言ってもＩさんは少し言語障害があるので、私には二日酔いなのか言語障害なのか分からなかった。何度か一緒に飲んだことがある私が分からないのだから、前の晩に大酒を飲んだなんて誰も気づかなかっただろうな。

Ｎさんは車の運転が出来るので、一度助手席に乗せてもらったことがある。その人の障害の特性なんだろう。頻繁に首を左右に振りながら運転をする。横で見ていると前を見ているのかどうか分からない。おまけに「くわえタバコ」だから心配でしょうがない。いつタバコがこっちに飛んで来るか分からない。Ｎさんには言わなかったが、２度と乗せてもらうことはないだろうと思っていた。

Ｐさんは大酒飲みで、ある年のお正月休みに何日か一緒に飲み続けたことがある。その人はかなりの言語障害があり、私には９５％聞き取れないと言っても決して過言でないぐらいだった。ところが不思議なことに、酔いが回るとなんとなく聞き取れるようになってきた。多分酒のせいである種の緊張が取れ、リラックスして聞けたからかも知れない。ある日Ｐさんから私の職場に電話がかかってきたことがある。しかし、その内容はさっぱり分からなかった。電話を代わってもらってＰさんの職場の同僚に聞いたら、Ｐさんは私に「豚一匹なんぼ (いくら) ですか？」と質問していたらしい。何故私にそんな質問をしてきたのかは忘れたが (聞いていないかも)、意味の分かる内容でも聞き取れないのに、意味の分からない言葉が聞き取れるはずがない。Ｐさんは私に「豚一匹なんぼですか？」が聞き取れると思ったんだろうか。

(武藤（むとう）　芳和（よしかず）)

追悼

上田舞（うえだまい）さんへ

推進協の理事、上田　舞さんが、2016 年 10 月 14 日お亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈りいたします。

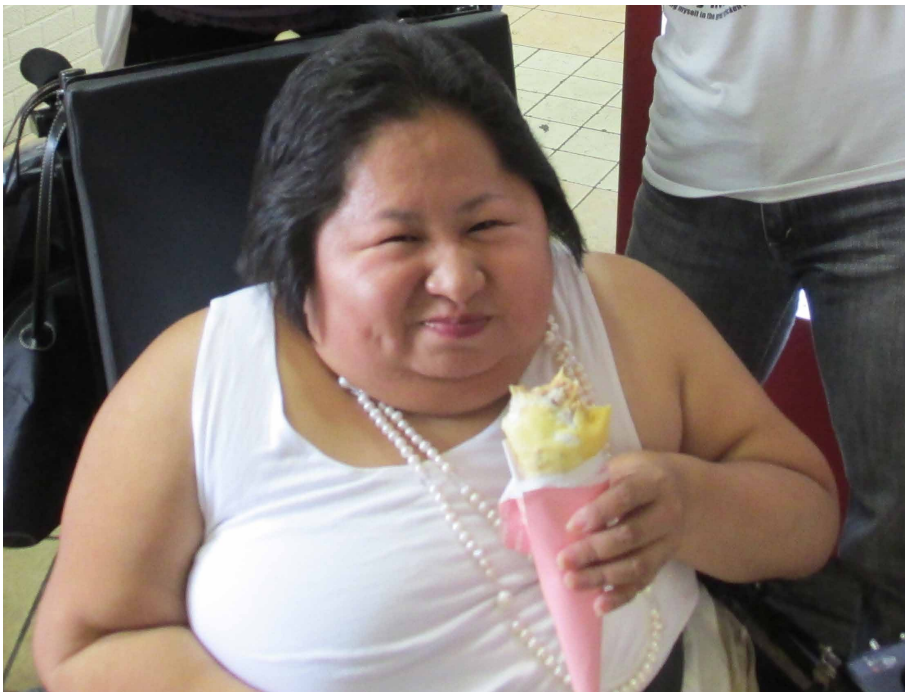
上田さんには以前、推進協ライフタイムミントのピアカウンセラーとして相談支援事業に加わっていただき、障害者である自分が人生の中で楽しかったこと、苦しかったことなどの実体験を根拠に、相談に来られた方達と真剣に向き合い、より良い生活を構築するための方向性を導き出しておられました。その頃はピアカウンセリングという概念が生まれたばかりの時期だったので、すべてが手探りの状態であった中、体当たり的に相談者に対する姿勢は、少なからず推進協のあるべき姿に影響を与えてくれました。

小柄な体のどこにそんなパワーがあるのかと思わせる動きは、私を常に驚かせてくれたのです。大きな電動車イスに乗り移動する姿は、電動車イス初心者の私に「負けるな！」とハッパをかけてくれているようでした。中途障害の私にとって上田さんの存在は、公私ともに人生の先輩としての存在だったのです。
数年後、地元の池田市でヘルパー派遣事業所「ライフサポートネットワークいけだ」を立ち上げ、代表として多くの仲間たちと活動のネットワークを拡大させたのです。それはヘルパー派遣の分野だけに留まらず、様々な他分野へも拡がりを見せました。

それとほぼ同時期に推進協の理事としても加わっていただき、貴重な意見や提案を示していただいたのです。自らが代表を務める事業所の運営を担いながら、推進協の理事を始めとする上田さんの活動は止まることなく拡大していきました。

上田さん自身は感じなかったのかもしれませんが、疲れていたのだと思います。休むことをしなかったから。もう十分だと思います。後のことは共に歩んできた仲間たちに委ねてお休みください。本当にありがとうございました。

理事長　武藤芳和



2013 年、当法人の資格講座にて講師をつとめてくださった時の上田さん

編集後記 ～こんなメンバーであんじょうやりました～

・今年は、今まで面倒くさがってしなかった事にチャレンジしようと思っています。まずは体を鍛えるために週一回のジムトレーニング。やった翌朝に強烈な筋肉痛になり、三日間腕が上がりませんでした (T_T) 継続は力なり。頑張って続け、体重を減らします！
(職員Ｋ)

・来月は娘の卒業式。三年前の今頃は行きたいと思っていた高校に合格し制服を買いに行った時も嬉しそうに試着してたなぁ。と……懐かしく思う反面、母のワタシは三年経って老眼が進み、携帯を持つ手もだんだん遠くなり……あちこち老朽化してきております (~_~;)
(職員Ｋ，Ｋ)

・100 号記念に誌面を大幅リニューアルしましたっ。本紙記事の編集ともども、各方面に協力いただいて時間の許す限りこだわった結果、手作り感を残しつつもオシャンティーな仕上がりになったのではないかと！昨年鑑賞した『シン・ゴジラ』があまりにも良かったので１万円もする設定資料集（図鑑並の厚さ）を買ってしまったんですが、黒澤明ばりの制作陣のこだわりように触発された部分もあったとかなかったとか。早くブルーレイも届かないかなー。
(びーどろ)

・膝の手術後、車椅子生活３週間。なってみないと分からない不便さに四苦八苦しつつ、人間なんにでも慣れるものだと実感。回復途中でインフルエンザになってしまい、数日間絶食状態に。みんなは、神様がくれたお休みだと思ってゆっくりしてき～と言ってくれたけど、えらくしんどいお休みになってます。ご迷惑をおかけしている皆様方には、この場を借りて感謝申し上げます。
(職員 〇)

・箕面の冬初体験の私。体感温度や除雪等々、やはり箕面は大阪府下でも別格だと身をもって実感している今日この頃です。夏の涼しさはまだしも、冬の更なる寒さは厳しいですね。仕事以外に、天候面でも早く箕面基準に適応せねば。皆様も、お体お大事に！
(職員Ｆ)

当法人の応援をお願いします！【会員募集】

当法人「箕面市障害者の生活と労働推進協議会」（略して推進協）は「障害者市民の権利および自立生活の促進」を理念に掲げ、活動しています。**当法人を応援してくださる会員を募集しています！**
現在、当法人では主に下記の活動を行っています。

ヘルパー派遣事業

地域で自立生活を営む障害のある方々に向けたヘルパー派遣を行っています。「居宅介護」や「重度訪問介護」などの在宅支援、障害の特性にあわせた「同行援護」「移動支援」などのガイド支援を行っています。

グループホーム事業

障害者市民の自立生活の一つとしてグループホームを市内で運営し、地域生活を支援しています。入居者の自主性を大切にし、その人の個性をよく見てできることは自分でしてもらい、できないことは少しずつできるように世話人が支援をしています。

地域交流センター事業

放課後、長期休暇中の活動保障として障害がある子どもや地域周辺の子どもたち、および市民が交流する場「さんかくひろば」を運営しています。また、保護者等に対する相談も行っています。

相談支援事業

障害者市民の自立生活への援助・アドバイス・情報提供を目的として、きめ細かい相談業務を行います。また、より多くの市民と共に将来の施策のあり方について検討を行います。

その他の幅広い活動

当法人独自の事業として移動困難者の支援を行う送迎サービス、当広報誌『ファーストラン！』の刊行、ヘルパー養成の研修やアートサークルの運営なども行っています。

今後も障害のある方々にとって暮らしやすい社会づくりにむけた活動を継続していきます。より一層のご支援・ご協力をいただきますようお願い申しあげます。つきましては、**一人でも多くの皆さまに、当法人理念および活動方針の賛同者であり応援者でもある「会員」になっていただき、当法人の活動を応援していただければと願っています。**

■ご入会について■

入会希望の方はご一報ください。入会申込書を送付いたします。会員の種別は下記の３種類となっています。

団体会員　会費 ：１口　　10,000 円
個人正会員会費 ：１口　　3,000 円
個人賛助会員会費：１口　　1,000 円

※団体会員・個人正会員は年に１回開催される総会に参加でき議決権があります。個人賛助会員に議決権はありません。
また、団体会員と個人正会員の議決権は１つで、口数には比例しません。
（口数が増えても議決権は増えません）。

当法人公式サイトからもお申し込みいただけます！下記のページに御アクセスいただき、画面の案内にそって必要事項を入力のうえ、お申し込みください。
http://www.suisinkyo.com/menbers

■お問い合わせ先■

072 － 723 － 3342（会員担当：木下（きのした））

みなさん、推進協の応援団、会員になってください！お願いします！

当法人について

当法人は箕面市内で様々な活動を行っています。
ご依頼・ご相談は電話・FAX・Email・公式サイトよりお問い合わせのうえ、各事務所へご来所ください。

●法人本部（第１事務所）●

ＮＰＯ法人 箕面市障害者の生活と労働推進協議会

〒562-0001　大阪府箕面市箕面 4 丁目 8 番 30 号

営業時間：月曜から土曜　午前 10 時から午後 6 時

TEL：(072)723-3342　FAX：(072)723-6506

Email：JDW07270@nifty.com

Website：http://www.suisinkyo.com/

お花屋さんの奥に入ったところにあります。

居宅・重度訪問・移動支援・同行援護等のヘルパー派遣事業や

グループホーム事業・通信発行事業をおもに実施。

●法人支部（第２事務所）●

地域交流センターさんかくひろば

〒562-0004　大阪府箕面市牧落 3 丁目 2 番 15 号

営業時間：月曜から土曜　午前 10 時から午後 6 時

TEL：(072)734-6833

FAX：(072)720-6835　Email：mintlife@big.or.jp

Blog：http://www.suisinkyo.com/sankakublog

地域交流センター事業・放課後等デイサービスを実施。

●法人支部（第３事務所）●

相談支援事業所ライフタイムミント

〒562-0004　箕面市牧落 3 丁目２－２６

グリーンみのおＡ棟１０１

営業時間：月曜から土曜　午前 10 時から午後 6 時

TEL：(072)720-6806　FAX：(072)720-6808

Email：mintlife@big.or.jp

相談支援事業・送迎サービス事業を実施。

編集／特定非営利活動法人　箕面市障害者の生活と労働推進協議会
〒 562 - 0001　大阪府箕面市箕面 4 丁目 8 番 30 号　電話：072 - 723 - 3342　FAX：072 - 723 - 6506
Email：JDW07270@nifty.com　郵便振替：00990 - 4 - 116066　公式ウェブサイト：http://www.suisinkyo.com

発行人／関西障害者定期刊行物協会　大阪市天王寺区真田山２－２　東興ビル４階

一九九一年九月三日　第三種郵便物認可　毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行　定価百円